
じゅもっこの下にて待つ

阿天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゅもつこの下にて待つ

【Nコード】

N8292U

【作者名】

阿天

【あらすじ】

俺が16年間慣れ親しんだこの街は、一夜にして亡者の群れに支配されていた。漂う死臭、不気味な静寂、おぞましい生物、弱肉強食という原初の秩序。何が起こった？俺が寝ている間に何が起こったんだ？時折浮かぶ幼少期の不可解な情景。絶望的な状況のなか、俺は偶然幼馴染の”デンタク”に出会う。

夢

「遅いぞ、ジャック。」

声が聞こえる。子供、少年のような声だ。どこかで聞いた事があるような気がするけど思い出せない。誰だ？どこにいるんだ？ジャックって誰の事だ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今度はハキハキした少女の声が聞こえる。これも聞いた事がある気がする。だが、何を言っているのかよく解らない。この子がジャック…？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふいに背後から声がした。驚いて振り返ると、メガネをかけた小柄な少年が立っていた。華奢な体系、猫の顔がプリントされた緑色のTシャツ…。

「お前、デンタクか！？」

俺は反射的に叫んでいた。懐かしい。小学生の頃はこいつとよく遊んだものだ。彼は目を丸くして首を傾げた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼は何か言葉を口にしたようだが、俺にはその意味が解らなかった。何故だ？こんなに近くで話しているのに、はつきりと聞こえているのに、外国語でも聞いているかのように意味が浮かんでこない。気がつくのと、デンタクは不思議そうな顔でこちらを見つめている。俺は急に恥ずかしくなった。

「なあ、お前…いま何て言った？」

恐る恐る尋ねると、彼はもつと不思議そうな顔をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから、その言葉は解らないんだって！日本語で喋ってくれよ！」俺はデンタクにつかみかかった。彼は俺をからかっているのだろうか。しかし、彼は純粹に戸惑っている様だった。

「●●●●●」

上の方からさっきの少女の声がした。その方向を見上げて、俺は驚いた。あれはレナだ。昔、家の隣に住んでいた細身の女の子。短く揃えた黒髪を風に揺らし、丘のてっぺんに仁王立ちしている。しかし、やはり言葉が解らない。

「ジャック。早く登ってこいよ。」

俺はドキリとした。見ると、丘の上にもう1人誰かが立っている。日焼けした肌、ボサボサの髪、しわくちやの黒いTシャツに、頭には大きな麦わら帽子を被っている少年。

「カイ・・・!」

何でさっき気づかなかったんだろう。カイと会うのは小学校以来だ。何だ?何が起こっているんだ?どうしてみんな集まっているんだ?まるであの頃のように。そうだ、何でもみな小さいままなんだ?

その時、俺は無意識に自分の手を見た。腕を見た。脚を見た。

「何で俺だけ・・・成長してるんだ?」

異変

俺は目を覚ました。夢を見ていたような気がするけど、どんな夢だったか思い出せない。なんだか体中がダルい。昨日遅くまでゲームしてたからかな、なんて事を考えながら起き上がった。布団から抜け出ると、寒さに震えた。そっか、もう11月だ。クラス替えまであと5ヶ月、次の夏休みまではあと8ヶ月くらいもある。俺はため息をついた。

制服に着替えて1階に降りると、リビングに誰も居ないことに気づいた。慌てて近くの壁に掛かった鳩時計を見る。午前7時4分。どうやら寝坊したわけでは無さそうだ。普段なら、この時間には父さんも母さんも居るはずなのに、何で居ないんだろう。ぼうつとして部屋を見渡してみる。電気の消えたリビングは薄暗く、朝とはいってもなんだかちよつと不気味だ。

とりあえず電気をつけないと。俺は電話台の横にある四角いスイッチを押した。しかし、電気は点かない。何度試してみても、プラスチック製のスイッチは虚しくカチカチと鳴るだけだった。

これはいいよおかしな事になった。事前に地域停電のお知らせなんてなかったし、何かしらの災害が起きたのだろうか。考えてもわけがわからなかった。

念のためブレーカーを調べてみたが、落ちてはいなかった。俺は首を傾げながらリビングを歩き回っていると、電話台の上にメモが置いてある事に気づいた。

慌ててメモを手にとって読みあげる。

「7:00発の友楽町線で銀座までミュージカル観に行つてきます。父&母より…聞いてないし。」

俺はため息をついて、メモを投げ捨てた。その時だった。

「サクト！九瀬サクトはいるか！いたら返事をしろ！」

表から男性の叫び声が聞こえた。俺はハッとした。この声には聞

き覚えがあつた。すぐに近くの窓に駆け寄り、勢いよく開けはなつた。

その瞬間、鼻をつく異臭と目を疑う光景が飛び込んできた。

向かいの家に突っ込んで大破した乗用車。フロントガラスがめちやくちやに割れ、車体は真っ黒に焦げている。車内には運転手と見られる人間がまだハンドルを握ったまま息絶えている。ぶつかつた衝撃と、おそらく燃料の爆発によつてか、遺体は皮膚がただれて原型を留めていない。

それだけではなかつた。家の前の広いバス通りには幾つもの車両が不自然に乗り捨てられており、バンパーが曲がつていたり、ボンネットがひしゃげているものもある。

さらに目を凝らすと、路上には何かよく分からない物体がいくつも散乱しているように見えた。ぼろぼろで汚い布のような何か。それはおびただしい数の死体だつた。ほとんどは皮膚がベロンとめくられて骨肉が露出している。異臭の正体はこれだつたのだ。生臭い血液の匂いにまじり、肉が腐食したような嫌な匂いがした。俺は吐き気がこみ上げてくるのを必死でこらえた。

俺は狼狽した。これは本当に現実に起こっている事なのか？ たつた一夜だけでこんな事になつてしまつたなんて信じられない。一体何があつたんだ？

「サクト！ いないのか！」

さつきと同じ声がした。途端に俺の脳は覚醒する。俺は裸足のまま、無我夢中で外へ駆け出した。

「タクマ！ 俺だ！」

家の前には自転車に乗つた幼なじみの井出タクマ、”デンタク”がいた。こちらの姿を確認すると、固く強張つていた表情が緩んだ。良かった。いつものタクマだ。そう思うとなんだかホッとした。

「サクト、ああ 本当に君なんだね？」

タクマはいつになく感極まった様子で言った。 泣いてる？

「 ああ。」

俺は言葉に詰まった。 まず何から聞いたらいいのか分からない。
俺が戸惑っていると、

「怪我は無さそうだな 話はあとだ。 移動しよう！」

「 え！？」

「荷物をまとめて来るんだ。 じきにヤツらが来る！」

そう言うと、タクマは俺を無理やり回れ右させた。 何をそんなに慌ててるんだろう。 まるで何かに怯えているようだ。

「あの タクマ？」

俺が恐る恐る話しかけたその時、タクマが突然あつと叫んだ。 3
0メートルほど離れたバス停の方を食い入るように凝視している。

「来た。」

タクマが小さな声でつぶやいた。 心なしか、その声は震えているように聞こえた。 俺はわけもわからず、とりあえず同じ方向に目を凝らした。

複数の死体が無惨に転がるアスファルトに、一つ歩く人影が見えた。 よたよたと不可解な足取りでうろついている。 顔までは見えな
いが、負傷しているように見える。

「人だ。」

タクマの方を向くと、彼はひどく青ざめた顔で言った。

「違う！ あれは肉食の化け物なんだ！ 人間じゃない！ 急いで戻って靴を履いて荷物をまとめて来るんだ。 自転車も忘れずに。 いいね？」

確認されたが、俺には早口すぎてさっぱりわけが解らなかった。
「落ち着けて、全然わかんねえよ。 なあ・教えてくれよ。 化け物って何だよ？ どうなってるんだよ？」

俺はタクマの服を掴んで激しく揺さぶった。 すると、彼は突然興奮したように俺の顔を覗き込んだ。

「そんな場合じゃないんだ！ いいから今は僕の言つとおりにしろ！
！」

鬼気迫る面持ちでこちらに訴えかける彼を見て、俺は思い出した。そういえばこいつ、昔からこんな風に急に命令口調になる事があったな。そんな時は決まって何かヤバいアクシデントが起こった時だつ。こいつはいつもそれに真つ先に気づいて・・・。

俺は静かに頭を下げた。

「取り乱して悪かった。お前を信じるよ。」

俺がそう言うのと、タクマは少し安心したようで、わずかに微笑んだ。

家に戻ると、俺は旅行カバンを広げた。なんだかよくわからない事態だけど、タクマによると一応避難所みたいな場所があるらしいやっぱりこれは災害なのだろうか。化け物ってなんだろう？ただの人影にしか見えなかったが・・・。

いや、考えるのは止そう。ヤバい状況なのは確かだ。急がなければ。

携帯、財布、定期入れ、毛布、防災袋。必要なものはとりあえずこんなところか。あとは適当に漫画とかゲームとか暇を潰せるものを入れておこう。避難所はとても退屈だつて聞いたことがある。俺は棚に積んである娯楽用品を漁りはじめた。うーん、なんとも煮え切らない。外の光景は凄惨だったけど、一步家に入ってしまうとそうでもなくなつてしまった。

俺は持つていくものを再度整理しようと思い、カバンを開いた。持ち上げてみたとき結構重かつたし、自転車に乗つて移動するならもつと軽くする必要がある。俺が頭を悩ませていると、突然、窓の外から耳をつんざく悲鳴が聞こえた。

今のはタクマの声だ！彼に何かあったのかと、俺は窓に駆け寄つた。

俺は絶句した。そこから見えた光景は恐いとか、そんな生易しいものではなかった。タクマが狂つたように逃げ惑っている。その後

ろには、数人の人影。しかし、生きている人間には見えなかった。

青ざめた肌、腐って骨が露出した腹部、全身には無数の引っかけ傷や歯型のような傷跡が生々しく刻まれている。表情は虚ろで、目は焦点が合っていない。首筋には血管が浮き出ている。

彼らはふらふらとした足取りでゆっくりと、しかし確実にタクマに迫っている。タクマはバス停とは反対側に走っていた。しかし、その先にはさらに多くの死体が待ち受けていた。

俺は反射的に走り出していた。

脱出

俺はカバンを置いたまま、1階へ駆け下りた。

玄関の扉を開けると、ふと俺の心に迷いが生まれた。本当にこの扉を開けてもいいのだろうか。外には得体の知れない化け物がいる。家に居た方が安全なのではないか？ここで踏みとどまる事も可能だ。俺は固く目をつむり唇をかみ締めた。

その時！

「サクトー！助けてくれ！」

タクマが俺を呼ぶ声が聞こえた。その声は絶叫に近かった。俺は力強く目を開けた。タクマが俺の助けを求めている。俺は扉を開けた。さっきまでの臆病な自分が可笑しく思えた。そして、急に「やってやるぞ」という思いがこみ上げてきた。

声のした方向へ走って行くと、目に飛び込んだのは死体の群れに囲まれ、追いつめられる友人の姿だった。

「タクマ！」

俺は思わず叫んでいた。すると、彼は笑顔で応えた。

「やあ、呼んでも来ないからてっきり見捨てられたのかと思ったよ！」

俺は苦笑いした。見慣れた現実とはかけ離れた景色の中で、唯一普段と変わらない友人の言動はなんだかホッとする。

「おい！何ひたつてんだよ。とにかく助けてくれないか？」

タクマの悲鳴に俺はハッと我にかえた。どうしよう？状況は最悪だ。しかも、考える時間もあまりないときている。

そうこうしているうち、1人の死体がタクマにつかみかかった。タクマは悲鳴をあげ、それを振り払った。しかし、その悲鳴に刺激

されたのか、死体たちはいつせいに襲いかかってきた。もうだめだとばかりタクマが目を目を強く閉じたその時、一台のプリンターが死体の群れに突っ込んできた。死体たちを次々にひき殺し、フロント部分が音をたてて凹んでいく。

やがてプリンターが群れの中心に躍り出ると、俺は勢いよくドアを蹴りあげた。

「早く乗れ！」

すると、タクマは何も言わず、しゅつと車内に身をすべりこませ、素早くドアを閉めた。

俺はそれを確認すると、力いっぱいアクセルを踏んだ。タイヤが地面でかすれ、ものすごい音をたてる。次の瞬間、車が急発進したため、2人はシートに後頭部をぶつけた。

車を取り囲んでいた死体たちはドカドカと弾き飛ばされ、時々ボンネットに乗り上げた。しかし、車を止める事はできなかった。二人を乗せたプリンターは、バス通りを南に向かって疾走していた。

俺はがむしゃらに車を走らせた。しかし、どここの景色も期待を裏切る有り様だった。行く先あちこちで黒い煙が上がっていたり、たまに死体がうろついていた。

やがて、ずっと黙っていたタクマが口をひらいた。

「どこもかしこも酷い有様だ。この街にはもう生きている人間はいないよ。」

そう言うタクマはうなだれた。俺は未だに残る疑問を聞いてみる事にした。

「何が起こってる？俺の寝てる間にいったい何が」

言い終わらないうちにタクマが口を挟んだ。

「寝てた？」

「ああ。昨日の夜からな。」

すると、タクマは顔をしかめた。

「え・・それじゃあ一週間何も異変に気づかなかったってこと？」

今度は俺自身が顔をしかめた。

「何言ってるんだ？昨日まではこんな事になっていなかったじゃないか？お前とだって遊んだし。」

すると、タクマは急に真剣な顔をした。

「ねえ、今日は何日だかわかる？」

あまりにくだらない質問に俺は拍子抜けした。

「それがどうかしたのか？」

「いいから言ってみろ！」

命令口調。どうやらタクマは大真面目らしい。俺はしぶしぶ答えた。

「はあ・・。今日は11月7日だろ？」

するとタクマはいきなりつかみかかってきた。

「ど、どうしたんだよ！？今日は11月16日だろ？」

「え！？何で？」

タクマはポケットから携帯を取り出すと、画面をこちらに見せてきた。

俺は言葉を失った。そこには「はつきり“11月16日”と表示されていたのだ。信じられなかった。自分には一週間の記憶がない。これはいったい何を意味するのだろう・・。」

タクマは静かに話し始めた。

「事情は知らないけど、サクトが一週間寝てたつてのは本当みたいだね。」

タクマはまだ半信半疑の様子だった。

「嘘だろ、一体どうなってるんだよ・・。」

俺はもう限界だった。何もかもが変わってしまった。俺は確かに寝ていた。でも一週間なんていくらなんでもあり得ない。でも、それを証明してくれるヤツなんて居ないのだ。どこにも・・・。

「サクト・・・」

タクマが心配そうに声をかけてきた。そうだ。考えてみれば、タクマを助けるために玄関から外に出たとき覚悟を決めたじゃないか。こんな状況なんだ、いつまでも沈んでいられない。俺はハンドルをギュツと握り締めた。

「・・・状況を説明してくれないか？」

「え？」

俺はタクマの顔をしっかりと見据えた。

「今この街で何が起きているのか、お前が知ってる限りで良いから俺に教えてくれ。」

とにかく自分が知らない間の出来事を知っておきたかった。

タクマは小さくうなずき、静かに話し始めた。

タクマが異変に気づいたのは今から5日前。何の前ぶれもなく街のあちこちで悲鳴が上がった。全身に深い傷を負い、半分腐りかけたおびただしい数の動く死体が現れたのだ。彼らは人間や動物など、動くものや音に反応してそれらを追いかける。彼らに捕まった者は捕食され、体のほとんどを食われていなければしばらくして彼らと同じように歩きはじめる。彼らはダメージを受けても怯まず、立ち向かったものは全員食い殺された。かろうじてヒトのような姿はしているが、ただ獲物を求めてひたすら追いかけてくる動作は野生的というよりは機械的で、おそらく感情を持っていないと思われる。タクマの通っている高校では、職員や生徒が協力して即席バリエードを設けて体育館に立て籠もっていたそうだが、彼は自分の家族の安否を確かめるために抜け出してきたのだという。そして、その道中、サクトの家に立ち寄ったというわけだ。

「僕の知っていることはこれくらいだ。電話もメールも通じないし、情報が全く無いんだ。何が起きているのかなんて、詳しいところ

は僕にもわからないんだ。信じてくれるかい？」

説明し終わるとタクマがボソツとつぶやいた。

「お前が言うなら信じるしかないな。第一、こんな状況でそれだけ事態を観察してたのはすごいよ。」

こつは言ったが、やはりもう少し情報が欲しかった。これからどうすべきかわからない。しかし、こんな状況でこいつと合流できたのは不幸中の幸いだ。

「とりあえずどうする？ 街から出るか？」

「いや、もし死体の群れが外から来たものだったらどうする？ まずは食料を探そう。」

俺は同意した。なるほど。ここは彼の言うことに従ったほうがいいかもしれない。

「お前さ、いつもと全然雰囲気違うのな。」

「え、そう？」

タクマは目を丸くした。

「ああ。言ってること正しいし、なんか頼もしいじゃん。いつもと違って。」

「最後のは余計だよ。」

そう言ってタクマは笑った。俺も自然に顔がにやける。なんだか少し安心した。問題は山積みだけど、こいつと一緒にならなんとかやって行けそうな気がしてきた。

「こつやって僕たちで組んで何かするのって小学生ぶりかな？」

タクマが尋ねた。

「そうか・・・そういえば・・・」

俺が小学生の頃の記憶を思い出そうとした時だった。

「ぐ・・・!!」

突然、激しい頭痛が俺を襲った。たまらず、俺は前かがみに倒れこんだ。ハンドルを握る手が緩み、車体がぐらぐらと揺れた。

俺は痛みを堪えながら、必死の思いでブレーキを踏んだ。

追跡者

「大丈夫かい？」

タクマが心配そうに差し出したミネラルウォーターを、俺は黙って受け取った。ゆっくりとフタをまわし、ちよびちよびと飲む。冷たさが刺激的で、それだけで正気に戻れたような気がした。感覚が麻痺しているような気分だ。

「ここにくる途中、コンビ二の前に散乱してるのを拝借したんだ。たぶん貴重になってくるだろうと思って……。こういう時に無いと困るだろ？」

タクマは首を傾げた。俺は彼の方を見てわずかに微笑む。

あの時、俺が謎の頭痛に襲われた時、タクマが助手席から身を乗り出して運転を変わってくれなかったら二人とも死んでいただろう。その後は彼が運転席に座り、俺は助手席に移動していた。こいつに会えて本当によかったと俺は思った。昔は変な理屈ばかりこねてる弱虫野郎だったくせに。

「すまん。もう大丈夫だ。」

俺はペットボトルを後部座席に置いてあるタクマのカバンにしまった。

「本当かい？休んでてもいいんだよ。」

俺は首を振った。頭痛は本当に治まっていた。それにしても不思議だ。もともと頭痛持ちではないし、体調は崩していないと思うのだが……。いや、考えすぎか。

俺は車の窓を開けた。風が冷たい。それに、やはり嫌なにおいがする。

「サクト、カバンから地図を取ってくれないか？外側のポケットに入ってると思う。」

俺は言われた通りにタクマのカバンを調べた。外ポケットには、ティッシュやガムが入っていて、奥のほうに文庫サイズの首都圏マ

ツプがあつた。

「これか？」

俺が見せると、タクマは頷いてマップを開いた。しかし、すぐに俺に返す。

「よくよく考えたら運転中には読めないや。運転するの初めてで慣れてないしね。悪いけどサクト、東久留米スポーツセンターを探してくれないか？」

「東久留米・・・というと、隣の市じゃないか。」

「メールが使えなくなる前、旧友から連絡があつてね。そこでも大人数が集団で立て籠もって避難しているらしいんだ。」

「へえ・・・」

よく知っているな、と俺は感心していた。とりあえずこいつについて行けば安心な気がする。

俺はマップを開いた。巻末の索引から”東久留米スポーツセンター”を探す。129ページ。あつた。全体図から想像してみても、現在地からそんなに遠くないかもしれない。センターの近くにあるシヨップिंगセンター、”マルカ堂”には何度か行ったことがあつた。

「なあ、近くに目立つ建物ないか？現在地を知りたい。」

俺は言つた。この車、スプリンターにはカーナビがついていない。俺はキヨロキヨロと風景に目を凝らした。これと言って目立つ建物・というか、名前のわかる建物が無い。

「無いな・・・」

タクマも同じ事を考えていたようだ。俺たちはため息をついて笑つた。死体を避けて適当に車を走らせていたら、いつのまにか知らない場所に来てしまつていたのだ。

「まずいな・・・本当にわからんよ。」

タクマが苦笑した。

「ああ・・・でもまあ、世界の裏側まで来ちまつたってわけじゃないんだから、そこまで深刻じゃなくね？」

こういう時はポジティブ思考だ。焦って失敗するより良いと思う。とはいえ、俺は（たぶんタクマも）相当焦っていた。

「あれ、何だ？」

どこか知らない大通りを走行していたとき、ふいにタクマがつぶやいた。彼はバックミラーを見つめて目を細めている。俺は思わず窓から顔を出して後ろを見た。

路上には何台かの乗り捨てられた自動車が停まっている。道路脇の住宅からは煙が上がっているのもあって、死体が単体でうろついているのが見えた。それ以外は特に何も見当たらない。

「なあ、何が・・・」

次の瞬間、急にスプリンターの速度が上がった。俺は頭を窓枠に強打してしまった。

「・・・痛・・・どうしたんだよ!？」

「何だあいつ!? 恐ろしく速い!」

タクマが叫んでいた。俺は反射的にもう一度後ろを振り向く。すると、スプリンターから50メートルほど離れたところ・・・こちらに向かって高速で走ってくるヒトの形をした何かがいた!

長い白髪、いや、全身が白い毛に覆われている。毛はところどころ赤茶色に変色しており、何かが付着しているように見えた。おそらく人間ではないだろう。そう言える根拠はその速さだ。

俺はスプリンターの速度メーターを見た。時速90キロと表示されている。しかし、追跡者は徐々にこちらとの差を縮めつつあった。「ありえない・・・どうして振り切れないんだ!」

タクマが後ろを振り返りながら絶叫する。

「知るか!とにかく逃げるぞ、ここはこの先ずっと広い道が続いてるし、信号なんか無視していいんだ。加速を続けるんだ!」

いつしか俺も叫んでいた。ちくしょう、一体どうなっているんだ。

頭に血が上ってくる。恐怖から来る興奮が心臓を早鐘のように鳴らしている。

その時、俺は（記憶上での）昨日のことを思い出した。たしか、父さんが仕事から帰ってきて母さんに言っていた。”ガソリンが残り少ないから、出かける用事があつたら入れといてくれ”。

「タクマ、ガソリン残量は大丈夫!？」

タクマはやや下に視線を移すと、右手でハンドルを思い切り叩いた。見ると、針はすでにレッドゾーンを示していた。

「サクト・・・悪いけど運転を変わってくれ。」

「え!？」

戸惑う俺を無視して、タクマは後部席に移った。

「おいおい!馬鹿・・・いきなり!」

俺はなんとかハンドルを握り、そのまま運転席に下半身をスライドした。車体が少しグラついたが、すぐ修正する。

「急にどうしたんだよ!？」

タクマは後ろで何やらカバンの中身を漁っている。ガチャガチャと水筒や弁当箱が散らばる。こんな時にいったい何をしようというのだろうか。

バックミラーを見ると、追跡者はさらに距離を縮めていた。あと30メートルくらいだ。その姿をしっかりと確認出来るほどにまで接近していた。

振り乱した白毛隙間から微かに覗く、真っ赤に充血した二つの眼。顔やシルエットは人間のようだが、その表情は野生的で獰猛な肉食動物を連想させた。

「あつた!」

タクマが歓声を上げた。見ると、彼の手には細長い銃が握られていた。

これは確か、レミントンM521Tだ。中学時代、タクマが大事にしていた愛銃だ。とはいえ、もちろん実銃ではない。日本ガンマニ

ア社製のガスガンだ。弾は8ミリの競技用BB弾を使用しているため、当たれば皮膚をえぐる事が出来る。中学時代、サバイバルゲームとまで行かないまでも、夢中になって銃で遊んでいた時期を思い出した。タクマは今もそれを保管していたのだろう。

「ガス入れといて良かった。いつでも撃てるよ。」

タクマは爽やかに言う。

「お前懐かしいもん持つてるな。」

「へへ・・・何かの役に立つと思ってね。こいつでヤツの両目を狙ってみる。」

。

タクマは後部席の窓から顔を出し、銃を構えた。

「なら少し引き付けてみるぞ・・・お前がヤツに命中させるまで追いつかれないぐらいにな！」

そうは言ったものの、あまり自身がなかった。今まで何となくで運転できたものの、細かい技術が必要な動作はいまいち自信が無いしかし、やらなくてはならない。無茶かも知れないけど、必ずしも無理ではないだろう。俺はゆっくりとブレーキを踏んだ。

その瞬間、スプリンターは予想以上の速さで減速してしまった。

「サクト！」

俺は慌ててアクセルを踏みなおす。ダメだ、やっぱり簡単じゃない。俺だって所詮素人か。でも、車って本来は誰にでも運転できるように設計されているんじゃないのか？

俺はもう一度ブレーキを踏んだ。今度はさっきよりも軽く。すると、ちょうど危険ではないくらいの速度でスプリンターは減速した。俺は上手くいったと思い、そのままその速度をキープするよう努力した。難しいが、ここで成功させなければあの化け物に喰われることになるだろう。

俺はちらとバックミラーを見た。追跡者はさっきよりもずっと近くに迫っていた。せいぜいあと20メートルを切っている。さっき

からかなりの距離を走っているのに、まったく疲れている様子があった。ただこちらを見つめ、信じられないスピードで追いかけてくる。怖い。俺は全身の毛が逆立つような恐怖を感じた。こいつは普通の死体たちとは何かが違う。タクマの説明にもこんなケースは出てこなかった。こいつは一体何なんだ・・・？

その時だった。突如、スプリンターのエンジン音が乱れ始めた。時折、ブスブスと言って不気味に途切れる。ついにガソリンが限界に近づいてきたらしい。

俺は覚悟を決め、さらにスプリンターの速度を減速させた。追跡者との距離が急速に縮まる。15メートル・・・10メートル・・・もうヤツの荒い息遣いが聞こえる。真っ赤な口を開き、刃物のように鋭い歯をむき出しにした化け物。その飢えた眼はしっかりと獲物を捕らえている。

その時、後ろでタクマが引き金を引いた。

マルカ堂攻防作戦

タクマが引き金を引いた。

弾は追跡者の頬の辺りをわずかにかすめた。予想以上に車の揺れが激しいようだ。

俺はバックミラーで背後を気にしながらスプリンターを徐々に減速させ、追いつかれないギリギリの距離で速度をキープしようとした。しかし、自分も所詮は初心者だ。微妙なコントロールは難しく、つい距離を離してしまう。標的と狙撃者の距離が変化すると、命中させるのは至難の業だと思う。

タクマはというと、何も言わずただ銃の照準に集中しており、俺がスプリンターを絶妙な位置にコントロールする瞬間を待っている。だからこそ俺は努力するのだが、燃料が死にかけている事もあってなかなか思うようにはいかない。

その時、車のエンジン音が途切れた。一瞬、俺には何が起きたかわからなかった。

次の瞬間、スプリンターが自然に速度を落とし始めた。俺はブレーキを踏んでいない。

「くそ、ついに燃料切れか！」

俺は絶叫した。そして、何度もアクセルを踏んだが、車の速度は上がらなかった。思わず後ろを振り返ったが、タクマは依然として照準を睨んでいた。

「ここだ！」

タクマが引き金を引くのが見えた。

その直後、車の背後で恐ろしいうなり声がした。見ると、追跡者が左目を押さえて身もだえしていた。命中したのだ！

タクマは続けて2発、ヤツの頭部めがけて弾丸を撃ち込んだ。追跡者は弾が命中するたびに悲鳴を上げ、頭をかきむしった。俺は思わず息を吞んだ。車からの距離はわずからメートルほどだったのだ。

「サクト！車を捨てよう。逃げるんだ！」

そう言うが早いか、タクマはまだ走行中のスプリンターから飛び降りた。銃を持ったまま、アスファルトの地面に転がる。そのままなんとか体勢を整え、俺のほうを見る。

俺は運転席のドアを開け、決死の覚悟で飛び降りた。着地時、バランスを崩して派手にすっ転んだ。痛い。肘や頭をぶつけながら地面を転がり、よろよろと立ち上がった。

「早くしろ！」

タクマが叫ぶ。俺は力いっぱい地面を蹴った。

「おい、あれ・・・マルカ堂だ！」

俺は眼前にそびえる建物を指差した。タクマは何のことかわからない様子だった。

俺たちは車から立ち去り、がむしゃらに町を逃げ回った。ここは車から少し離れた繁華街のような所だ。大きな電気屋やホームセンター、ファミリーレストランといった店舗が立ち並んでいる。今まで見てきた景色とはさほど変わらないように見えた。

追跡者が追ってくる姿は見えないが、50メートルも離れたところから追ってくるようなヤツだ。油断はならない。

「さつき・・・地図を見たとき、スポーツセンターの近くにマルカ堂があるのを見つけた。俺前に行ったことあるんだ・・・ここがそのマルカ堂だ！」

俺は息も絶え絶えタクマに言った。

「じゃあ、スポーツセンターはこの近くってことか！？」

「おそらくな・・・いや、間違いない！」

その時、後方であのうなり声が聞こえた。俺たちは反射的に振り返った。

100メートルほど離れた後方の茶色いビルの横・・・追跡者の姿

が確認できた。こちらに向かって走ってくる。その速さはちつとも衰えていない。やはり、ガスガンだけではほとんど効果はなかったようだ。

「来た！！どうする・・・！？」

俺が聞くと、タクマは珍しく迷っていた。

「僕は・・・一刻も早くスポーツセンターに・・・！」
タクマがかすかにつぶやく。

「ここからどう行くか知ってるのか！？」

「いや・・・でも僕は・・・」

追跡者はもうすぐそこまで迫っていた。もうこれ以上鬼ごっこは続けられない！

「ここは一旦、マルカ堂に入ろう！」

タクマは顔をしかめた。

「なぜ・・・！？センターはもうすぐそこなんだよ！！」

俺には彼がなぜセンターにこだわるのかわからなかったが、強引に腕を引っ張った。迷っている暇なんか無い！こんな見通しの良い場所ではあのスピードから逃げられるわけが無い。どこか隠れる事ができる場所に逃げ込むのが一番だ。

「走れ！全身全霊を懸けて走るんだ！入り口のドアはたぶん電気が止まってて開かない・・・体当たりでガラスを破るしかない！」

「・・・わかった。」

タクマは一応うなずいた。俺たちは一か八か、マルカ堂へと走った。

マルカ堂の一階は照明が消えていて暗かった。目が慣れてくると、俺は辺りを見渡した。物が少し散乱しているようだが、歩けないほどでもない。問題は、この店内にヤツらのような化け物がいるかどうかだ。しかし、さっきから物音はせず、不気味なほどの静寂が辺

りを支配している。迷っていても仕方が無い。

俺はスポーツ用品コーナーのある二階へ続く階段へ向かおうとした。バットやテニスラケットなど、武器になるものがあると思ったからだ。しかし、タクマがそれを止めた。

「サクト・・僕に考えがある。食料品コーナーに行こう。」

また妙な事を言い出した。こんな時に食料集めか？まだ追跡者は追ってきているかもしれないのに。

俺は首を振った。

「頼む・・信じてくれ！」

俺は彼の顔を見た。決してふざけているわけではなさそうだし。かし・・。

突然、入り口の方でガラスの割れる音がした。微かに光が漏れているその方向を見ると、あの毛むくじゃらの化け物が立っていた。ガラスがついた体を手で掃い、低くうなっている。もう追っかけてきやがった！

しかし、追跡者はすぐに追いかけてくると思いきや、しばらくその場でキョロキョロと辺りを見回していた。やがて、俺たちのいる方向とは違う方向に歩き始めたかと思うと、またもとの場所に戻った。

「やっぱりだ・・」

隣でタクマが囁いた。俺には何の事だかさっぱりわからなかった。そして、彼は俺の腕をつかむと言った。

「これなら少し時間を稼げるな・・。」

「おい！どうしたんだよ！？」

「黙って言うことを聞け！」

タクマが俺の腕を強くつかんだ。命令口調・・。俺はやれやれと首を振り、おとなしくタクマについて行った。

俺たちはタクマの提案で食料品コーナーに来た。周囲に気を配って敵の存在に備えたが、気配どころか、物音ひとつしない。後ろの追跡者もまだ入り口付近で躊躇しているようだった。

入り口から近かったのもあって、俺たちは真っ先にお目当てのものを見つける事ができた。それは酢だ。すぐに全身に酢をかける。作戦とはいえ、嫌な気分だった。ためらう俺に、タクマはこれでもかというほど酢をかけ、自分も頭から大量にかぶっていた。彼によると、これは俺たちの臭いを消すためらしい。

「さっきからアイツを観察してたけど・・アイツ、僕たちの臭いに反応しているんじゃないかって思うんだ。」

「臭い・・?」

「ああ・・。僕がアイツの目を潰した後、ヤツは100メートル以上の距離があるにもかかわらず追いかけてきた。」

「そういえばそうだ・・しかし、俺は疑問をぶつけてみる。」

「でも、もう片方の目は無事だったじゃん。」

タクマは首を振る。

「そもそも、ヤツの顔は毛に覆われてて、ちゃんと前が見えているかどうかさえ疑わしい・・それに、僕たちが逃げていたとき、ヤツが居た車の近くからはマル力堂の前は見えなかったはずなんだ。」

確かに、俺たちが車を捨てた位置からはマル力堂は茶色いビルに隠れて見えなかった。

「たぶん、ヤツにとって視覚はあくまでサブ的なものに過ぎないと思うんだ。本当に頼りにしているのは・・おそらく嗅覚だ!」

「じゃあ・・俺たちの臭いを頼りにここまで来たって事か?」

「そうだと思う。」

俺は感心した。すごいな・・。あのギリギリの状況でこれだけの観察と推理をしていたとは・・。俺は苦笑いした。何の策も無しにマル力堂に突っ込んだ自分が恥ずかしくなったのだ。

「で、それを踏まえてこれからどうするんだ?」

俺は聞いた。悔しいが、もう俺にはこの先どうしたら良いかなん

てわからない。タクマの考えに頼るしかなかった。

「確証は無いんだけど、うまくいけばヤツをここに留めて置く事ができるかもしれない。無茶な案なんだけど、サクトの協力が必要不可欠なんだ。協力してくれるかい？」

俺はニヤリと笑って見せた。

「お前が言うなら信じるしかないな。」

「ありがとう。」

タクマは安心したようにホッと溜め息をついた。断れるわけないだろうが。お前のおかげで今の俺がいるようなもんなんだ。

「サクト、さつきはごめん。」

いきなりタクマが謝った。俺は意表を突かれたのと、何の事が分からないのとでどぎまぎした。

「え 何が!？」

「さつきだよ。僕がスポーツセンターを探そうって言った時 君、止めてくれただろ？助かったよ。あそこで君が止めてくれなかったら、今の僕は……」

「おいおい待てよ！そんな大した事してねえって!」

俺は慌てて手を振った。

「咄嗟に思いついたのをそのままやつちまっただけだって。何も考えなんか無かったんだ。なのにお前も一緒に こんな暗くて見通しきかない、明らかにヤバそうな場所に連れ込んじゃって……。謝るのは俺の方だ。」

俺はうなだれた。言葉にしてみると、改めて自分の不甲斐なさに嫌気がさしてくる。俺は何をしているんだ。何度も命を救ってくれた友人を巻き込んで、危険にさらして。なのに、自分では現状を打開する策なんて思いつきもしない。俺はなんて勝手なんだ。あの時玄関の扉を開けた時に確かに心に決めたはずじゃなかったのか。彼を救うと。この世界をこいつと生き抜くと。

「そんな事ないよ。」

タクマが静かに言った。俺は激しく首を振る。しかし彼は続けた。

「サクトはいざという時に正しい手段を見つける事ができるじゃないか。スプリンターで死体の群れを蹴散らした時とか、僕じゃ咄嗟に思いつかないような奇策を君はやってのけた。」

「あれはなんとなく滅茶苦茶やってみただけで。」

「関係ないよ。とにかく、君が僕を救ったのは事実だ。変に罪悪感を感じる事ないよ。」

「おお・・・。」俺はとりあえず頷いた。なんだか上手くごまかされた気がするが。

タクマは立ち上がり、食品棚の隙間から追跡者のいた方向を見ていた。そして、小さく頷くと、俺の方を向いた。

「じゃあ、これから作戦の方法を説明するよ。」

「おう、頼むぜ。」

タクマは静かに話し始めた。

マルカ堂入り口、小規模食事スペースに、追跡者はいた。獲物を見失ってしまったのだ。ここは非常に暗く、追跡者の視力では近くに何があるかを理解するのがやっとだった。発達した嗅覚に頼ってみたが、様々な匂いが混在していて今ひとつ目標を定められない。しかし、一度見つけた獲物を逃そうとは思っていなかった。追跡者は昨日から何も食べていなかった。

すると、どこからか甘くうつとりするような匂いがしてきた。追跡者は瞬間的に理解した。これは血液と生肉の匂いだ。思わず追跡者は匂いのする方向に歩き出した。しかし、同時にある事に気づく。これはわずかに腐肉の匂いが混じっているような気がする。追跡者は迷った。しかし、現在その頭を悩ませ続けている空腹感には耐える事ができなかった。多少腐っていようが構わない。一刻も早く生肉を貪り喰いたいという衝動が追跡者の脚を前へ進ませる。口内に獲物の血液が流れ込むあの何とも言えない感覚。もう止まらない。

追跡者はだらだらと涎をたらし、匂いのする方向へとひたすら走った。

そこは、もといた場所からそれほど離れていなかった。地面に生肉がぶちまけられている。追跡者はその匂いに恍惚とし、やがて取り憑かれたかのように肉を喰らい始めた。手掴みで肉の塊を口に運び、呼吸する間も惜しいほどの速さで咀嚼していく。至福の時だった。

俺とタクマはその一部始終を物陰に隠れて見ていた。どうやらタクマの作戦は上手くいったようだ。

あの後、俺たちは生鮮食料品コーナーに向かった。異変からかなりの日にちが経過しているとはいえ、棚にならんでいる食品は見た目的にはそこまで腐っているようには見えなかった。パック詰めされた肉を種類に関わらず片っ端から開封しては床にばら撒いた。早くしなければ匂いを感じいた追跡者が来てしまうため、俺たちはとにかく急いだ。

うまくいったとはいえ、追跡者が肉を喰らっている光景は衝撃的だった。自分たちがあなっていたのかと思うと恐ろしい。かすかに身震いする手を無理に握り締めた。

その時、

「やばい・・・！」

タクマが押し殺した声で囁いた。俺にもそれが何を意味するのかわかっていた。しかし、恐怖のあまり声が出なかった。

俺たちのすぐ近く、せいぜい5メートルの距離にある棚。俺たちの隠れている棚より一つ追跡者側の棚の影から、動く死体が2体、突然現れたのだ。両方ともこちらに気づいている様子は無く、歩く先には追跡者がいる。

俺たちは思わず息を呑んだ。ここで音を立てたらまずい！しかし、本音を言えば、今すぐここから逃げたい！俺はさっきの腕の震えが全身に広がっているのに気づいた。あまりの恐ろしさに目から涙がこぼれそうになる。逃げたい。逃げたい。しかし、目はカッと見開いたまま死体たちに釘付けられてしまっている。視線を逸らしたくても体が言うことを聞かない。

やがて、さらにとんでもない事態が起きた。店内からゾロゾロと死体の群れが集まってきたのだ。さっきまでは気配すら感じなかったのになぜ？理由なんてわからないが、俺たちは明らかに絶体絶命の状況だった。タクマでさえ唇を噛みながら震えている。さすがにこの状況では彼もどうしようもないといった様子だ。

追跡者のいる場所に近づく死体たちは増え続け、その数は約10体ほどになった。その時だった！

追跡者はうなり声を上げて立ち上がったかと思うと、そばにいた死体に襲い掛かったのだ。周りにいた死体も影響されたのか、次々に追跡者に喰らい付いていく。

俺はタクマと顔を見合わせた。タクマは信じられないというような表情をしていた。

追跡者は死体に噛み付き、その皮や肉を引き裂いていく。しかし、周りの死体たちも束になって追跡者の体を囲み、ついには押し倒した。両者は恐ろしい声で吼え、激しい乱闘を繰り広げていたが、やがて追跡者は死体たちに埋もれて見えなくなった。

変種第7号

目の前で、追跡者のものと思われる腕がもぎ取られていくのが見えた。噴出す大量の血液、断末魔の叫び……。すべてがあまりに凄惨すぎて、現実味がわかない。しかし、身体は恐怖を感じているように、さっきから腰が抜けてしまつて立ち上がれない。首筋から全身にかけて小刻みに震え、目からは涙が流れてきた。

俺たちは呆然とその場に座り込んでいた。動きたくても動けない。タクマの方を見ると、彼も驚愕と恐怖の表情のまま脱力していた。俺たちはこのままではヤツらに喰われてしまつたろう。喰い殺されるのは嫌だ。死にたくない。それに、俺はまだこの世界でやり残した事がたくさんある。そうだ、父さんや母さんは無事だろうか、ちゃんと避難しているだろうか。心配だ。急にそんな事が頭をよぎつた。ああ、今すぐ会いたい。家に帰りたい……。そして、またいつものように楽しく食卓を囲めたら……。

高校に入ってから、自分の部屋に閉じこもつてばかりで家族とともに会話するのは食事の時くらいだった。別に居心地が悪かつたわけじゃない。ただ、自分から壁を作っていたのかもしれない。

なんだか今更のように罪悪感がこみ上げてきた。なんで今までもっと家族を大切に出来なかつたんだ。下らない意地を張つて……。でも、それは平穩がいつまでも続くとはい込んでいたからだ。なんて馬鹿だつたんだろう。事が起こらなければ気づけないなんて……。

今、今更、こんな事を思うのは酷く勝手かもしれない。でも、俺は生きたかつた。どうしても、なんとしても、この瞬間を生きたかつた。日常を取り戻したい。でも、そんな立派な意味じゃない。自分が安心したいだけだった。目覚めた瞬間、何もかもが変わつてしまつていた世界。その中で俺はまだ自分に起こつた事の真実すら知らないのだ。こんな悔しいことがあるだろうか？

<逃げたいか？>

・いや、逃げたいわけじゃない。怖いけど、現実から逃げようとは思わない。

<なぜ？>

・わからない。ただ、何かが・何かが引つ掛かるんだ。

<逃げたいか？>

・それは今……

<私が聞いているのは、この場から逃げたいかということだ。>

俺はハツと我にかえた。今のは一体……？頭の中に声が響いてきたような……。俺は無意識に会話をしていた。誰と？

「サ、サクト……！」

タクマがしゃがれ声で言った。俺が振り向くと、

「今……何か聞こえた……よな？」

「ああ……。」

どうやらタクマにも聞こえたらしい。二人で顔を見合わせる。そのとき、

<もう一度聞く。ここから逃げたいか？>

声が聞こえた。少女のような高い声だった。今度は、俺もタクマもはっきりと聞き取れた。慌てて周囲を見回す。

しかし、発信源と思われるものは見あたらない。途方に暮れていると、また同じ声が聞こえた。

<はやく答える。あまり時間が無い。>

やっぱりだ。頭の中に直接聞こえてきている。どんな方法で話しかけているのかはわからないが、とにかく何か答えなければ！

「き、君は・・・誰なんだ？」

俺が何か言おうとしたとき、タクマが先に聞いた。

<質問に答える！お前たちはここから逃げたくないのか！？>

さっきよりも乱暴な口調で声が言った。俺たちは思わず飛び上がりそうになる。

「出来ることなら今すぐ逃げたい！君は俺たちを助けてくれるのか！？」

俺は叫んでいた。どこへともなく、適当な方向に。もしかしたら間違っているかもしれない。

しかし、

<私はお前たちに比較的安全な逃走経路を教えてやる事ができる。ただし、条件付きでな。>

俺たちは顔を見合わせた。こんな馬鹿な話があるだろうか？絶体絶命のピンチ、突然頭に届いたテレパシーの声・・・どこかのSFみたいだ。

タクマも信じられないという顔をしていた。果たして、この声を信用しても良いのだろうか？俺は迷った。そもそも、頭に直接聞こえる所がおいしい。俺たちは同時に幻聴でも・・・

<幻聴ではない！>

突然、声が怒鳴った。俺たちはうるささに頭を押さえた。

「・・・これは・・・どういう意味だ？」

顔をしかめたタクマが俺に聞いた。

「俺たちの心を読んだ・・・とかじゃないか？」

俺は半信半疑で答えた。頭がおかしくなりそうだ。いや、すでにおかしいのかもしれない。俺は必死で現在の状況を推理しようとしたが、すぐに無駄と悟った。

<細かい話はあとだ。私は今、2階の事務所内にいる。そこまで来るんだ。場所はいま教える。お前たちにその意思があるならな。>

声が言った。あいかわらず機械的で冷ややかな声だ。おそらく人間の声だろうが。

「サクト・・・どうする？」

珍しくタクマが俺に聞いてきた。俺は・・・

「・・・信じよう。俺たちが生き延びるには、もうそれしかない。」

確証なんて無かった。しかし、このままでは俺たちに先は無い。

それに、俺はこの得体の知れない声に不思議と安心感を覚えていた。タクマはゆっくり立ち上がった。

「・・・そうだね。サクトの言うとおりだ。」

俺も恐る恐る立ち上がる。もう腰は抜けてなどいなかった。

「さあ、誰だかわからないあんた、俺たちは立ったぜ？」

少し間が空いて、

「わかった。お前たちに逃走経路を教えよう。」

俺たちはさっきいた棚から十数メートル離れて、レジの近くに身を潜めた。声の言う事に従い、敢えて無数の死体が集まっている場所を通った。しかし、死体たちは予想を裏切り、こちらを振り向きはしても襲いかかってくる事は無かった。

あの通常種はお前たちには興味を示さない。お前たちより遥かに脅威となり得る存在・・・例えば変種のようなものに反応して全力で排除しようとするのだ。

声は静かに説明した。

「その特殊用語がわからない。通常種とか変種って何だ？」

タクマが顔をしかめながら訊いた。

いいだろう、今は安全だから説明してやる。

声自身の話によると、彼女は周囲の生物や物体の配置、動き等の情報を全て把握しているらしかった。そのため、俺たちをこの場所まで安全に誘導する事が出来たというのだ。しかし、それをどんな

手段で知ったのかは教えてくれなかった。

それにもかかわらず、俺はもうあまり声の事を疑ってはいなかった。得体の知れない存在ではあるが、彼女の言う事は今のところ正しいし、こちらに敵意は無さそうだ。しかし、腑に落ちない点が2つある。

1つは、何故俺たちを助けたのか。そして、もうひとつは、何故自分自身はまだこの店内にいるのかだ。1つ目の疑問は考えても仕方がないだろうが、2つ目の疑問はどうだろう。ここまで完璧な逃走経路を把握しているにもかかわらず、こんな敵だらけの空間で待機しているのは変だ。何か理由があるのだろうか、あるいは・・・？通常種というのは、外見上はヒトの死体に見えるタイプの下等生物の事だ。さつき見ただろう。そろそろと群れなしているやつだ。

声の説明は続く。

「生物だつて！？あれは死体じゃないのか？」

タクマがうるたえたように叫んだ。

確かに。見た目は負傷していたり、所々腐敗が進んでいたりする。しかし、内部の細胞活動はお前たちに劣っていない。むしろ、お前たちヒトのそれより活発に活動している。

「何だつて・・・！？」

お前も見た事があるだろう。通常種はほとんど疲労しない。それどころか、痛みすら感じないのだ。

俺はタクマが車上で言っていた事を思い出した。

半端な外的損傷を与えるだけでは、通常種の生命活動を停止する事はできない。頭部を粉碎するか、神経を焼き切る方法が有効だと思われる。

「映画みたいだな・・・」

「あんだ、そんな事どこで知ったんだ？」

タクマは真剣な面持ちで聞いた。

その話は後だ。ヤツら、今度はこちらに興味を示したようだ。

俺たちは立ち上がった。遠くだが、生鮮食料品コーナーらへんか

らゴソゴソと音がする。もう追跡者を食い終わったという事だろうか。

レジの近くの棚から飲料水のボトルを取れ。

声が言った。何に使うというのだろうか。俺は適当に近くにあったペットボトルを取った。

それでいい。それを絶対に手放すな。

俺たちは一応領いた。どのみち、飲み物や食料品は持ってないし、これから避難を続けるには必要となってくるだろう。

それから、足下をよく探してみる。細長いライトが落ちているはずだ。

「細長いライト？」

俺は顔をしかめる。

「ペンライトじゃないか？ほら、あった。」

タクマはしゃがんで床を手探りで探し、何かを手に握りしめていた。

カチツ。軽い音とともに、小さな丸い灯りが灯った。光に照らされ、お互いの顔がぼうつと浮かび上がる。なるほど、これで幾分歩きやすくなる。

それを右方向に投げろ。できるだけ遠くにだ。

「何だつて!？」

俺は思わず叫んでいた。

「これ以上、こんな真つ暗闇をライト無しで進むなんて無理だ!このライトは足下を照らすためじゃないのか？」

「そうだよ。一体、何のために捨てるんだ？」

タクマも反論している。しかし、声は馬鹿にしたように溜め息をつくと、

黙って言う事を聞けないのか、ヒトという生物は。通常種は暗闇に弱い。したがって、光に群がる習性があるのだ。

じゃあ、今これを点灯させているという状況は……。俺の頭から血の気が引いていく。

「タクマ、そいつを投げるんだ！」

俺の悲鳴に驚いたタクマは身を震わせると、そのままペンライトを暗闇に向かって思い切り投げた。

ペンライトは回転して光の輪っかのようになって飛び、微かに風を切る音を立てながら、やがて40メートルほど離れた位置でガツンと何かに衝突した。

これでいい。幸い、ヤツらも今の衝突音の方に反応を示している。逃げるのは今しかない。

「わかった・・疑って悪い。これからはあんたを信じるよ。」

俺は全身が武者震いするのを感じた。

疑っていたのか・・無理も無い。では、始めるぞ。

声は俺たちに逃走経路を説明した。

覚悟

入り口付近に戻った俺たちは、階段を上って2階の紳士服売り場にやって来た。一階とは違って変わって、ここには通常種と呼ばれる類の生物の姿は確認できなかった。

声は、暗闇の中を進む俺たちを的確にナビゲートしたので、俺たちは迷うことなく目的の場所、事務室へ向かうことができた。

暗闇はそれなりに不気味だった。声は、敵はすべて一階に集まっていると言っていたが、俺たちは常に身構えていた。恐ろしい体験を何度もしたのだから無理も無いと思う。

タクマは心なしに、呼吸が荒くなってきており、酷く怯えているように見えた。俺たちは一步一步慎重に進んでいた。

俺たちが声に従ったのにはこんな理由があった

「なあ、そろそろ教えてくれないか？」

タクマが恐る恐る切り出した。

「何を？」

俺は不意を突かれてビックリしたが、彼の方を向いてこたえた。

「違う。サクトじゃなくて・・・」

<私の事だろう？>

頭の中に例の声が響いた。

俺たちは反射的に目線の斜め上を見た。どうもこの声には慣れない。頭の中とわかっていても、耳から聞こえてきたように感じてしまう。その発信源は無意識に斜め上のような気がして、目が反応してしまうのだ。

「いいかげん、君が誰なのか教えてくれないか？僕たちだって、正体のわからない存在に従うのは不安で仕方ない。ここは丁度、入り

口の近くだ。僕たちはこのまま出ることできる。」

タクマは右手向こうの入り口を指差した。外から光がさし込んでいる。ああ、確かに早くここから出たい・・・。

こんな視界の利かない閉鎖的な空間にはこれ以上居たくないのが本音だ。それに、この声の正体は何なのか、何が目的で俺たちを助けたのかまだわからない。となると、このまま声を裏切って脱出した方が安全と言えるかも知れない。

ない。

<私が信じられないということか？>

ストレートに来了。タクマは一瞬戸惑ったが、

「そ、それは・・・まあ。」

彼はそのまま俯いてしまった。代わりに俺が声に食ってかかる。

「当たり前だろ。全部俺たちに説明するべきだ。話はそれからだろ。」

長い沈黙のあと、声はようやく答えた。

<私だつて隠すつもりはない。しかし、今は時間が無い。一刻を争うんだ・・・！>

俺は驚いた。”声”の声のトーンが少し変化したように感じたからだ。今まで、まるで機会音声のように冷ややかだった声のトーンが、今のは何か必死な感じに聞こえたのだ。何かに焦っているのだろうか。いや、焦っていると

いうよりは、何かに怯えているような・・・恐れているような・・・。

「どうしたって言うんだよ。何か来るのか？あいつらよりも強い生き物が近くにいるとか？」

タクマは苛立ったように言った。もうすぐここにもあいつら通常種が来る。決断を急がなければ、逃げられなくなってしまう。

<違う・・・！そうじゃない。私は・・・>

その時、遠くの方で何かがぶつかる音がした。注意深く耳を済ま

すと、微かだが、近づいてくる無数の足音のような音が聞こえてくる。俺は直感的に、やつらが来たと察知した。

「おい！来たぞ！」

「くそ・・・やむを得ない・・・！」

そういうが早い、タクマは入り口に向かって駆け出した。

ガラス戸に開いた穴の端を踵で蹴り、広げていく。その音に反応してやつらが寄ってきてしまうだろうが、彼はお構いなしというように蹴り続けた。

やがて、ガラス戸には縦1.5メートル、横1メートルくらいの大穴が開いた。ここまで大破しているにもかかわらず、ガラス戸のロックは頑丈でびくともしない。

「さあ！もう諦めて車に戻ろう。銃もそこにある！」

タクマは、階段の前で躊躇している俺に向かって叫んだ。

「何してる！早く来い！」

彼の口調が命令口調に変わった。いよいよ時間が無いのだ。そんな事は俺だってわかっていた。でも、俺の足はまだ動かない。

俺は何を躊躇っているんだろう・・・？普通に考えれば、さっさと逃げればいい。それですべてが解決する。俺たちは外に出て、そのあとはスポーツセンターへ行く。それですべて・・・。

俺は胸の辺りがぞわぞわと疼くのを感じた。

いやまて、声はどうなる？俺たちが彼女に逆らって外へ逃げたとしても、彼女はまだ建物の中にいる。

その時、俺の頭に一つの疑問が生まれた。

もしかして、彼女は、逃げられないんじゃないのか？きっとそう。彼女は何らかの理由で、今、自力では逃げられない状況にある。だから、俺たちを呼ぶことで助けてもらおうとしているのではないだろうか・・・？

「おい！あんた、もしかして、俺たちに助けが必要なのか？」

俺は無意識に叫んでいた。後ろでタクマが俺を呼んでいる。しかし、今の俺には聞こえなかった。

「答えてくれ！そのために俺たちを助けてくれたんじゃないのか？」
俺の絶叫に対し、声は実にか細い声で、

<・・・恥ずかしいがその通りだ。私は今、身体的な問題で自力では逃げられない。>

<ここからの脱出を手伝わせるためにお前たちを呼んだ。すべてはそういうことだ。>

声ははき捨てるように言った。自分の状態を恥ずかしく思っているようだ。何故だかはわからないが。さっきからずっと命令口調で焦ったように俺たちに指図していたのは、この性格と早く助けて欲しいという気持ちによるもの

だったのか。俺はホツと微笑んだ。別に俺らを騙そうとか、危害を加えようとか、そういうつもりではないみたいだ。

「そういう事ならはじめからそう言えばいいじゃないか。変に命令されるより、よっぽど協力する気になると思っぜ？」

俺は笑いながら言った。

<黙れ。一刻を争うと言っただろう。で、どうするんだ？>

俺はまた笑った。なんでそんなに強がるんだろう。素直に「助けて」って言えば良いのに・・・。

「決まってるんだろ。助けに行くよ。」

「サクトー!!」

タクマが絶望をこめた悲鳴をあげた。俺は頭を掻いた。

「確かに、このまま逃げれば安全かもしれない。でも、俺はあの時どうした？家の外でお前が死体に襲われていた時、俺は何故かわからんが逃げなかったんだよ。タクマ、お前を助けるために。別に俺の計算もなかったけどさ。」

。。
「

俺はタクマの顔をしっかりと見つめた。

「でも、でもさ、あの時・・・あのまま思いとどまっていたら俺は絶

対後悔してたと思うんだ。自分の事だけ考えていれば、一応は危険を避けることが出来るかもしれないよ。こんな世界になっちまったし……。他人の事考える余裕

なんて、正直言つて無いと思う。でも、こんな非常事態だからこそ、俺たちは他の誰かの事も考えなくちゃいけないんじゃないかって思うんだ。」

すべて言い切ってから、俺は黙ってタクマの顔を、彼の目を見つめた。

タクマはふつと息を吐き、軽く視線を逸らした。そして、顔を上げると、優しく微笑んだ。

「ごめんサクト……。君に助けてもらった時の事、僕すっかり忘れてたみたいだ。あの時君がどんな気持ちで家を飛び出したのか、考えた事も無かった。自分が助かることだけ考えて……。サクトの言うとおりだよ、ごめん……。」

「

タクマは深く頭を下げた。

「別に謝れなんて言つてねえよ。むしろ、頭を下げるべきなのは俺の方だ。」

「え……。？」

「頼む、タクマ！俺と一緒にマルカ堂に残ってくれ！俺はあの声の主をどうしても助けてやりたいんだ！」

俺はタクマにむかつて頭を下げた。

「や、やめてよ！それに、君が頭なんか下げなくたって僕の心はもう決まってるよ。」

俺はゆっくりと顔を上げた。不思議と胸が熱くなるのを感じた。

「ありがとう……。」

俺たちは揃って階段に足をかけた。

「おい！聞こえるか？」

俺は視線の斜め上に向かって叫ぶ。

<聞こえている。>

声がぶつきらばうに答えた。まったく、これが本当に助けを求める者の態度だろうか。

「今から俺たちはそっちへ行く。だから、救出経路とやらを頼むぜ。」

俺はニヤリと笑った。

「早くしてくれ、もうすぐそこまで来てる!」

タクマが急かす。

<わかった・一度しか言わないからよく聞けよ。>

「なあ、ここか?」

俺は目の前の黒いドアを指差した。上のほうに、
” S T A F F
O N L Y ” と書かれている。

「ああ。間違いない。事務所つてのはここだよ。」

タクマが興奮気味で言った。

<そのドアには鍵が掛かっている。蹴破れ。>

声が難題をさらりと押し付ける。

「相変わらず常識はずれな事言いやがる。」

俺とタクマは、見よう見まねで映画っぽく肩から体当たりしてみた。

ドスンとものすごい音がしたが、ドアはびくともしない。運動不足の細腕が痛む。俺は顔をしかめた。

<馬鹿か。そのやり方では力が分散してしまうだろうが。鍵の位置を狙って足で強く蹴るのだ。>

声がやれやれといった感じで言う。

「なんでそんなこと知ってんの?」

「いや、でも正しいよ。ドアを開けるには、ドア全体を要は鍵を壊

すだけでいいんだ。」

俺は半信半疑で鍵の位置を思い切り蹴った。

ギギツ・・・！さっきと違う音がした。なんか壊せてるっぽい・・・？

さらに立て続けに4、5回蹴る。すると、

ドガン！と鈍い音がしてドアが開いた。

「よっしゃ！開いたぞ！」

俺は歓声をあげて中に入った。内部は散らかっている様子も無く、普通の事務室に見える。ただ、奥の隅っこのほうに何か壁に寄りかかって倒れている人がいる。小柄で、細くて、いや、子供だ！

タクマが背後であつと何か思い出したような声を出した。

「携帯のライトがあつたよ！」

彼はそれをすぐに点灯させた。ぼうつと光が灯り、目の前にいる誰かの顔が映し出された。

その光景に俺は思わず息を呑んだ。

「レナ・・・！？」

困惑

<どうした？>

少女がこちらを怪訝そうに見ている。しかし、俺たちは何も言わずに呆然としていた。

俺にはまだ信じられなかった。目の前に横たわる少女の顔は、たしかに幼馴染みのレナだ。しかし、印象はだいぶ違う。綺麗だった黒髪にはところどころ白髪がまじり、汚れてボサボサしているし、体の線も病的に細い。

そしてもう一つ、信じられないことに、彼女の姿は小学生の頃の姿と変わっていなかったのだ。面影が残っているとか、そんなレベルではない。身長も、顔立ちも、腕も、脚も、体のすべてのパーツが幼く未成熟なのだ。

<いま言った単語の意味は何だ？>

少女が聞く。口は動かしていない。頭に直接語りかけてきている。「おまえ・・・レナか？宮城レナか？」

俺は我慢できずにそう言っていた。少女は微かに首を傾げると、<意味がわからない。何を言っているんだ？>

やはり別人なのだろうか。年齢もぜんぜん違う。彼女は俺たちと同じ年だ。普通に考えて、同一人物とは思えない。でも、そんなはずは無い。なぜか俺は心の中でそう思った。理由は自分でも解らないのだが、なぜか強くそう思える。

<レナとは何のことだ？>

またも少女が聞く。不意に頭がぼつと熱を帯びたような気がした。

「何って・・・それは・・・」

そう言いかけた時だった。

「ふっ・・・!!」

一瞬、何が起きたのかわからなかった。目の前の景色がぐらんと

らんと揺れる。続いて、頭に鋭い痛みが走った。

俺は思わず目を瞑った。両手で頭を強く抱え、痛みに悶えた。無闇やたらと激しく頭を振ると、まる脳内で無数の針が転がっているかのような痛みが襲う。

「どうしたんだ！？サクト！？」

タクマの声が遠くから聞こえてくる。何なんだこの頭痛は。さっきも同じようなことがなかったか？車に乗っていたときだ。あの時も突然・・・

右肩に強い衝撃が伝わった。そして、頭の右側面にもそれが伝わる。転倒してしまったのだろうか、俺にはもう上下左右もわからなくなっていた。

意識が遠のく・・・。

やがて、目の前が真っ暗になった。

蝉の鳴き声が聞こえる。

夕刻を告げるチャイムが鳴り響くなか、夕焼け空に照らされて橙色に染まった丘の斜面の草むらの中を、数人の子供達が走っているのが見える。

「・・・・・・」

真っ黒に日焼けした、麦わら帽子の少年が言った。俺は瞬時にそれが誰だかわかった。

カイだ！ニヤリと笑いながら、ボサボサ頭が揺れる。あの髪としわくちやＴシャツは間違いなく彼だ。しかし、何て言ったんだらう。よく聞き取れなかったけど、あれはこの国の言葉だらう。

「のぞむところよ！先に着いた人がリーダーね！」

少女の声だ。風に黒髪をなびかせ、黄色いワンピース姿の少女がカイを追い越した。間違いない。レナだ。彼女は細い腕を力いっぱい振って、みるみるうちにカイとの差を広げていく。

その後ろから、メガネの少年が息を切らしてついて来る。

「待ってよ、レナ！カイ！速すぎるってば……。」

彼はデンタクだった。華奢な体でなんとか追いつこうとしているが、遅い。

なんか懐かしい。俺はぼんやりとそう思った。季節は夏。おそらく、俺が小学校四年生の頃の夏休みだろう。はつきりとは覚えていないが、何故だかそんな気がした。あの頃はこうやってどこでも走り回っていた。あの頃は何もかもがただただ自由だったなあ……。「じゃあな、リーダーは俺だぜ。」

突然、カイとレナの近くの草むらがガサガサと揺れた。2人はギョツとして思わず足を止める。

草の揺れは勢いよく丘を駆け上がっていく。

「●●●●」

カイが何か叫んだ。草むらから1人の少年が飛び出した。その姿に俺は目を見張った。

それは俺自身だった。サラリとして、ところどころ茶色い毛が混じった黒髪。泥だらけの赤いTシャツ。

幼い姿の俺は、勝ち誇った表情で丘の頂上を目指す。その後ろから、レナ、カイ、デンタクと続く。4人の子共達は楽しそうにきやあきやあ喚きながら、丘の斜面を登っていた。

俺はゆっくりと視線を上の方へ移した。

丘の頂上。幻想的な夕焼け空と、大きく膨らんだ夏の入道雲をバックに、それは子供達を見守るように立っていた。太くてたくましい幹には苔が生え、何匹もの蝉がとまっている。青々と美しい葉をつけた枝が風に揺れる。幾重にも重なった葉が擦れ、ざわあざわあ」と波のような音をたてる。

大きな、ケヤキの木。

目を開けると、まず飛び込んできたのはタクマの顔だった。

「サクト！大丈夫かい？」

彼は心配そうに俺の顔を覗き込んだ。俺は静かに頷くと、ゆっくり上体を起こした。

ぼんやりしながら、俺は何度かまばたきをした。

辺りを見回して、俺はようやく我に返った。狭くて薄暗い部屋。積まれたダンボール箱や書類。

思い出した。俺はいまマルカ堂にいるんだ。それで、俺は頭痛がして……。俺は頭を撫でみると、倒れた時にできたタンコブがあったが、さっきの痛みは嘘のように消えていた。あれはいつたい何だったんだろう。

「ふーっ。俺、どのくらい寝てた？」

俺はタクマに聞いた。

「そうだな、10分くらいだと思うよ。」

俺は溜め息をついた。こんな非常時に俺はなんて呑気なんだ。

「悪い。下の階のヤツらが来たらヤバいのに、俺のせいで……」
すると、タクマは笑った。

「大丈夫だよ。サクトを見捨てたりはしないさ。それに、アイツらはまだ一階でうろついてるし。」

俺は顔をしかめた。

「まだ一階にいるだって？何でわかるんだよ？」

「この子がそう言うんだよ。」

タクマは部屋の隅を示した。そちらを向くと、レナに似たあの少女が横たわっているのにきづいた。

「うわあっ！」

俺は思わず飛び上がってしまった。そういえば存在を忘れていた。はつきりとは見えないが、少女はムツとした表情でこちらを睨んだ。
<何を驚いている？私はさっきからずっとここにいるぞ。>

頭に声が響く。

「ああ、ごめん。ぼんやりしてたんだ。すまんすまん。」

俺は慌てて謝った。眠りから覚めた後は頭がよく回転していないから困る。

「なんだかな・・夢を見てたんだが。」

「夢？」

タクマが聞いた。

「ああ。なんか懐かしい夢だった気はするんだけど・・あれえ？」
俺は首を傾げた。

「どうしたんだい？」

「うーん・・忘れちゃった。」

「これからどうするんだ？」

俺は聞いた。

「そうだったそうだった、それを今2人で話してたんだよ。」
タクマは少女に目をやった。少女はもそもぞとして、体をわずかに起こした。

「その前にさ、結局こいつはどこの子なんだ？」

俺はかねてからのモヤモヤをぶつけた。

「この子は・・。」

タクマが言う前に、頭に声が響てきた。

<その呼び方はあまり好かないな。私がお前たちに見下される理由はない。>

「別に見下してるわけじゃ・・。」

<私は変種第4号。お前たちのような名前は無い。>

それきり、少女は黙ってしまった。“変種第4号”なんて、いくらなんでも長すぎだ。

<長いだろ？>

少女が言った。俺は一瞬驚いたが、すぐに苦笑した。そういえば、こいつは俺たちが思った事を読み取るんだっただけ。

「ああそつだよ。こつちだつて呼びにくいぞ、4号ちゃん。」

「うん、もつとちゃんとした名前がいいよ。」

タクマが考え込む。

<そんな事はどうでもいい！今はそんな呑気なことをしている場合じゃないんだ！>

「アアアウワアア！！」

少女が自分の口から喋った。しかし、言葉にならない吼え声のような声だ。俺はビックリして思わず飛びのいた。彼女は口を閉じると、やがて苦しそうに咳き込み始めた。

「おまえ・・・喋れなかったのか・・・？」

「ごめん！今は一刻も早くここから脱出しなければならなかったね。」

タクマは少女の肩を優しく抱きかかえ、背中をさすった。俺も何かしようと思つたが、とりあえず手を握ることにした。

俺は少女の手に触れてみてギョツとした。少女の指はゴツゴツと骨ばつていて、関節の感触が不気味だった。俺はだんだん彼女の体が心配になってきた。どうしてこんなになつてしまったんだろう。病気？あるいは、ケガをしているとか・・・？

<この体は生まれつきだ。>

少女が言つた。まだ息は荒いが、さつきに比べて幾分落ち着いている。

「生まれつき、病弱なのか？」

俺はぼそつとそう呟いた。

<さつきも言つたとおり、私は変種だ。おそらくは通常種が変異して生まれた存在だ。肉体に欠陥があつてもおかしくない。代わりに精神感應能力が備わっているがな。>

俺がキョトンとしてしていると、タクマが説明した。

「この子・・・じゃなくて7号は、広い意味で言つてしまえば追跡者の兄弟みたいなものなんだ。つまり、ヒトが何らかの方法で感染して、本来は通常種になるはずが原因不明の現象によつて彼女のよう

に意思を持ったタイプの種が生まれたという事らしい。」

「それじゃあ、こいつはヤツらと一緒にして事か？」

「まあ・・・広い意味ではね・・・。」

俺は首をすくめた。

「なんじゃそりや、あまりにも突拍子無さ過ぎねえか？」

「確かに。僕だって初めは信じられなかったよ。でも、7号の言っていることは正しい。僕らだって、彼女の助けが無かったら死んでいたじゃないか。」

「それはまた別の話だろ・・・。つか・・・。」

俺は俯いた。ダメだ・・・。

「何なんだよ・・・もうワケわかんねえよ。」

実際、今日一日に起きたことはあまりに多すぎて頭が混乱していた。すべてが非現実的すぎて、ただただ戸惑うばかりだ。はつきり言って、俺はもう限界だった。

「そうだよね・・・いきなり理解しろって言われたって難しいよね。ごめん。」

いや、タクマは何も悪くない。俺の頭が現実について行っていないだけだ。俺は首を振った。

「悪い・・・今の取り消す。」

「え？」

タクマが目丸くした。

「元はと言えば、俺が巻き込んだ件だ。馬鹿な事言っただけで良い立場じゃない。」

タクマは微笑んだ。そして、説明を続けた。

7号は、もともとはヒトだった。しかし、この異変のさなかに通常種があるいは変種に噛まれ、その時にあるウイルスに感染した。身体を変異させてしまう恐ろしいウイルス、それが今回の異変を引き起こしたと考えられる。そして、彼女は誕生した。本来、変異したら生前の記憶や意思は消えてしまいが、彼女の場合は意思だけが残っていた。

それともう一つ、彼女には特殊な能力が身につけられていた。精神感应能力だ。彼女は一般的に言う視・聴・味・嗅・触の五感以外に、周囲のあらゆる情報を収集するための第六感覚が備わっている。それは、生物の精神や思考、建物や地形などの情報も細かに読み取ることが出来、目をつぶっていても脳内に立体的な映像が浮かぶらしい。

しかし、その代償なのかは定かでないが、彼女の体は非常に脆く弱い。最近では歩く事は愚か、自力で立ち上がる事すら出来ないという。無理に動けば、生命を脅かす危険もだろう。

この数日間、彼女は能力を駆使して様々な情報を収集し、言語をはじめとする基本的な情報から、この異変に関する事まで調べ上げているという。

「彼女は今までたった一人でこの異変の中を生き延びてきたんだ。すごいよ。」

説明を一通り終えてタクマが言った。

「しかし、この異変の原因がウイルスだなんて・・・そんなことまでわかるのか。」

俺は感心していた。まるでファンタジーのような話だったが、彼女の言うとおりにしていれば自分たちも生き残る事が出来るかもしれない。これは単純に心強かった。

<それはあくまで仮説だ。こんな大規模な生態系の異常災害が自然に起きる事は珍しいし、原因があるとしたら新種のウイルス兵器か何かであるとも考えられるが・・・>

「はつきりとはわからない・・・と？」

<・・・そうだ。>

少女は少し間を置いて答えた。俺は頭を掻いた。

「そうか・・・そうか。なんかやつぱりまだ信じられない気分だけど、君が敵じゃない事はわかった。」

少女はふん、と鼻を鳴らした。

「問題は、これからどうするか、だ。」

俺は切り出した。

「ああ、さつき少し相談してたんだけど、とにかくまずは建物の外に出よう。ここに居ても下の通常種が来るのは時間の問題だろうし・。」

<逃走経路は把握している。ここへ来るときにお前たちが使った階段を上って4階の駐車場から車用の通路を通って外に出る。しかし、見張りが3体いる事が厄介だ。>

「見張り!?!」

俺は聞き返した。

<通常種が3体、4階の駐車スペースに配置されている。それらと接触することは避けられない。>

俺は顔をしかめた。

「おいおい・・・！接触ってまずいじゃないか！喰われちゃうよ。」

<捕まる前に外に出ればいい事だ。>

「外に出たって追いかけてくるじゃないか!」

少女はやれやれといった様子で首を振った。俺はわけがわからずタクマに助けを求める。

「ここの通常種は外には出ないんだ。飼われているからね。」

タクマは静かに言った。俺は耳を疑った。

「飼われてるだって・・・?」

<そうだ。1階の通常種を含め、この建物内にいる通常種はすべてが組織化され、それぞれ役割を持って動いている。>

「なんだって!?!通常種は間抜けな下等生物とか言ってなかったっけ?」

<そこまでは言っていないが、確かに通常種は群れで行動したりしない。あくまで単独行動をとる。しかし、この建物の連中は違う。操られているのだ。>

少女は苦笑いした。

「そんな・・・誰が操ってるって言うんだよ?」

俺が恐る恐る聞くと、

<変種第3号だ。>

俺は絶句した。また変種だ……。という事は、彼女が自分の事を7号と言っていたのだから……。少なくともこの世界に変種は7種類以上存在しているということになるのだろうか。あの追跡者のようなヤツらがたくさん……。恐ろしい。俺は身震いした。

<あれこれ想像しているな？しかしそれほど心配しなくてもいいかもしれないぞ。変種第3号はこの建物全体に根を張り巡らしている巨大な植物だ。>

「……え？」

俺は少女の方を見た。少女は相変わらず笑っている。

<だがなかなか厄介だぞ。変種第3号は特殊なフェロモンで通常種をおびき寄せ、養分を与える代わりに自分を守るように洗脳するのだ。根の表面から分泌される養分には依存性の強い薬物が混じっていて、その味を知ったが最後、永遠に奴隷となるのだ。>

「……結構怖いじゃねえか。で、そんなヤツどうやってあしらうんだ？」

<変種第3号は自分の縄張りを守るために私たちを排除しようとしているだけだ。この建物から出てしまえば、あとはもう興味を示さない。>

「そんな事くらい俺にもわかるよ！」

俺は反論した。

「問題は、どうやって出るか、だろ？」

少女とタクマは頷いた。

<ここからはただの脱出作戦なんかじゃない。例えるなら、兵士をどう動かすか。そういう、れっきとした知能戦になってくる。>

俺は武者震いがするのを感じた。とても怖いが、同時になんだかワクワクする。全身の血液が滾るような、そんな感覚だ。

「やるっきゃないね。」

タクマが俺の方を見て言う。俺はニヤリとした。額には一筋の汗が流れる。

「ああ。やるっきゃない。」
絶対に生き残ってやる。俺はそう、固く決意した。

外へ

「なんかすげえよな。」

4階へと続く階段を上りながら、俺は無意識に呟いた。

「何が？」

7号を負ぶさっているタクマが聞いた。高校では運動部に入っているという彼だが、さすがに今はしんどそうだ。

俺たちは事務室から出た後、建物の北側にあるという階段に向かった。駐車場のある4階に行くにはエスカレーターやエレベーターは使えない。エレベーターは動いていないし、エスカレーターはそもそも3階以上には設置されていないのだ。

蛍光灯はおるか非常灯すら点いていない階段は暗く、上るのに苦労した。俺は、四つん這いになって両手で段の位置を探りながら上った。すぐに運動不足の体が悲鳴を上げかけたが、そこは横のタクマの存在もあり、耐えた。こいつはあの少女は担ぎながらこの階段を上っているのだ。手を付けられず、踏み込む足先で段を探っているが、恐らくかなりキツいだろう。それに比べたら俺の疲労感なんて可愛いもんだ。弱音を吐くわけにはいかなかった。

「すごいっていうか、なんか俺ら今、日常じゃ考えられないような事やろうとしてるんだなアゝって思うと感動的っていうか……。よくわからんけど、武者震いがする。」

俺は笑いながら言った。周りではとんでもない大惨事が起きていて、当たり前のように凄惨で非日常的な光景が広がっているわけだが、その中に自分たちも少しずつ順応していつているように思えた。退屈しのぎばかり探していた日常生活とは全てが違う。生きるか死ぬか、みたいに漫画染みた言葉が相応しい世界。でもまだやっぱり現実離れして見えるな、と俺は思った。

「まあ、まだ完全に状況を理解できてはいないんだけどな、実際。」
「そんなの僕だって同じだよ。こんなの悪い夢かもしれないって思

う事はよくある。」

荒い息遣いでタクマが言った。彼は「よいしょ」と言って7号を背負い直した。

「サクトにとつて、この異変はかなり突然起こったように見えるだろうけど、それは僕も同じだよ。」

そこでタクマは少し暗い顔をした。

「僕が被災した・・・って言うのかな、この異変を目の当たりにしたのは学校で授業を受けてた時だった。」

俺は何を言ったらいいのかわからなかった。タクマが見てきた光景は、俺なんかの想像を絶するだろう。最初に会った時の彼は、常に何かに怯え、表情が引きつっていた。おそらく、俺に会う前に地獄のような恐ろしい体験を幾つも味わったのだろう。それでも、タクマは俺を助けに来た。

「俺たちは生き残るぞ。」

俺はボソツと言った。

「うん。」

タクマは前を向いたまま答えた。

階段を上り終え、俺たち3人は4階駐車場フロアに来た。

物陰に身を隠しながら壁ごしに様子を窺う。エレベーターの前に黒い人影が見えた。

エレベーター前に通常種が1体。もう2体は駐車場の奥にいる。

ヤツらの能力では暗闇で私たちを発見する事は不可能だろうが、物音は立てるな。

（言われなくてもわかってるよ。）

サクト、これからの作戦はお前に懸かっている。雑念を振り払って集中しろ。

俺は顔をしかめた。どんな小さな音も立ててはいけないからとい

つても、頭の中で会話するのは面倒くさい。タクマと会話する場合は7号を中継しないといけないし、いろいろとややこしい。

例の物はちゃんと持っているな？

俺はポケットの中身を探った。7号の言う通りに集めた道具の感触を確かめる。よし、どれも落としてない。

（あるぜ。大丈夫だ。）

では、打ち合わせ通りに実行するぞ。私たちは非常階段へ向かう。その間に、お前はヤツらを陽動しろ。ヤツらの配置に変化は無いから、全て上手くいく。

（オーケー！）

俺は駆け出した。

階段から物音がして、その通常種は振り返った。背の高い女性型の通常種はうろろと音の方向へ歩き出した。

闇の中に、微かに赤い光の点が見える。それは地面に転がっているらしかった。通常種は本能に従ってその点に近づいた。

通常種が冷水機の横を通り過ぎようとしたその時、俺は物陰から飛び出した。持っていた自転車用チェーン錠で通常種の胴を囲むと、そのままそれを壁面に取り付けられたパイプに通し、鍵をかけた。不意を突かれた通常種は、噛み付こうとしてバタバタと暴れ出したが、拘束状態から抜け出す事はできなかった。

俺はすぐにそこから飛び退き、そのままへなへなと座り込んでしまった。全身から冷たい脂汗がたらたら流れ落ちているのがわかる。呼吸が荒い。心臓が早鐘のように打っているのを感じる。

とてつもなく危険な賭けだった。2階のスポーツ用品売り場で7号が見つけたチェーン錠とLEDライトを使ったほぼ捨て身の作戦。一歩間違えていたらと思うと震えが止まらない。

何休んでる。さあ、次に進むぞ。

頭に例の指令が届いて俺はうんざりした。ちょっと待ってくれよ。上手くいったのが当然かのように言いやがる。レナに似てさえないな。かったら殺してるところだ。

俺は稼働しない自動ドアのガラスを無理やり蹴り壊し、駐車場に出た。

肌に当たる外気が冷たい。なんだか久しぶりに外に出た気がする。日の光が眩しく感じたのと同時に、急に安心感が溢れた。

不用意に動くな。奥にもう2体、下の階にはもつという。とはいえ、今は休眠状態のようだがな。

（休眠状態？）

変種第3号から養分を与えられているという事だ。今のヤツらは何らかの刺激が来ない限り動かない。しかし、気づかれたら終わりだ。

俺は唇を噛んだ。「終わり」・・・試合に負けるとか、受験に落ちるとか、そんな終わりとはレベルが違う。ここで終わったら、待つのは人生の「終わり」。死だ。

（瀬戸際ってやつか・・・）

タクマはもう覚悟を決めているぞ。お前はいつまで狼狽しているつもりだ。

俺はさつき階段で見たタクマを思い出した。タクマは口をへの字に曲げ、鋭い眼差しで辺りの様子に目を光らせていた。額は青ざめて汗だくではあるが、力強く地に立っていた。

それを見て俺は焦った。タクマのこんな表情を見たのは初めてだった。あいつはいつも気が小さいように見えるけど、必ず何か上手い手段を知っている。しかし、さつきはそんな普段とは対照的で、ある種追い詰められているような気迫があった。タクマでさえ今は何も策がない。その事が俺を不安にさせた。

今はそんな馬鹿な事は考えるな。必要なのは集中力だ。

（あんたがもつとマシな指揮官だったら安心できるんだろうか。）
俺は溜め息をついた。

私の言う事は信じろと何度言えばわかるのだ。私の命令は絶対だ。お前はそれに従えばいい。

（どっちにしろ、この状況じゃもう後には退けないじゃないか。ずる賢いやつだよ。）

そう言うが早いのか、俺は走り出した。目指すは正面、駐車場を真っ直ぐ走る。

（かなり臭うな・・・どこで漏れてるのか知らんが。）

ガソリンの臭いが漂ってきた。このフロアに十数台停まっている車両のどこから漏れ出したのだろうか。だとすると、これはかなり広範囲に流れていると思われる。俺はポケットを探った。100円ライターの感触を確認して、気を引き締める。万が一、通常種に見つかった場合にはこいつを使えと言われた。正直、それだけは避けたかった。

それはあくまで最終手段だ。私の指示があるまでは絶対に点火するな。

（そんな簡単に使えるかよ。こんなの使って下手したら俺が死ぬんだぞ？）

ガソリンは気化しやすい。点火するポイントを間違えれば爆発に巻き込まれる危険もある。注意しろ。

（おいおいマジかよ・・・なんだって俺がこんな危険な役を・・・ん？）

俺は思わず立ち止まった。地上に続く道路の両側、緑色をした巨大な葡萄の房のような物体が天井から垂れ下がっている。それは時折ピクピクと脈打ち、生きているように思えた。

（なあ、なんか変なのがぶら下がってるけど？）

よく見ると、その奥にもおびただしい数の葡萄が列になって垂れ下がっていた。巨大な葡萄の房は道に沿って下の階へと無数に続いていた。南国の植物のように気持ち悪いほど鮮やかな黄緑色の葡萄が等間隔に配置されている異様な光景を前に、俺は恐怖を覚えた。

それは変種第3号だ。正確に言えば、その一部に過ぎないがな。

俺は全身に鳥肌が立ったような感覚を覚えた。これが、変種第3号だというのが。植物であるらしいが、全然そうは見えない。むしろ、何かのオブジェに近い。こんな巨大で不気味な形状の植物は見た事がない。いったい、これは何のための器官なのだろう。

あれは変種第3号の栄養タンク・・とても言ったところだ。葉で合成した栄養分の一部を蓄えている。

（栄養タンク・・って事は、あれをぶっ壊しちまえば第3号を倒せるとか？）

馬鹿な事を言うな、あれはヤツのための養分ではない。通常種を餌付けするための養分だ。

意味がわからなくなった俺は、なんとなく栄養タンクに近づいてみた。

それ以上それに近寄るな！

7号の叫び声が俺の頭を軋ませた。俺は踏み出そうとした足を慌てて引っ込めた。

（なんだよ！？）

見る、変種第3号の感覚毛の生えた根が地面に張り巡らされている。

俺は足下の地面を見た。タンクの下から、黄緑色をしたゴボウのような根っこが、網の目のように地面に伸びていた。よく見ると、根の表面からアンテナのように細長い毛が伸びている。これが感覚毛だろうか。

（これ触るとどうなの？）

触れた所から電気信号が伝わり、私たちの存在が母体に認識されてしまう。

（じゃあ踏まずに歩けばいいんだな？）

俺はタンクとは反対側の端に移動した。

それだけじゃない。栄養タンクの中をしてみる。

俺は言われるがままにタンクを見た。ぶくぶくした房の表面には血管のような細い管のようなものが無数に浮き出ている。それらが

一定のリズムに従って震動している。その中、何か影が見えるような・・・いや、気のせいじゃない。何か黒くて大きなものがタンクの中にいる。しかし、微動だにしない。

（これは・・・いやしかし、まさか・・・！）

そうだ。それは通常種だ。

俺はもう一度影を凝視した。言われてみると、確かに人間の形をしている。房の中で、通常種は胎児のような姿勢をしたまま眠っていた。こちらに気づいている様子は無い。

その時、タンクの下の方がグニャグニャと動き出した。

（おい、なんだこれ！）

タンクは奇妙な動きを繰り返し、やがて、下の方から変な液体が漏れ出てきた。茶色いその液体は、鼻が曲がるような臭いを撒き散らしながら流れてきた。

3号に気づかれたのだ！通常種がタンクから出てくる、下へ走れ！

俺は駆け出した。タンクの横を通り過ぎる時、次々に中身を解放していくタンクが横目で見えた。まずい、どんどん開いていく。何故気づかれた？さっきエレベーター前で拘束した通常種の情報が漏れたのかもしれない。

後ろの方でボトボトと重い物が落ちる音が聞こえ、やがて恐ろしい唸り声がした。ついに解き放たれた通常種の群れが、大群となって追いかけてくる。俺は後ろを気にしながらも螺旋状に曲がった道を懸命に走った。

壁に“二階”の表示がある。よし！あともう少しで一階に着く。地上に着いてすぐにこの建物から離れれば、あの通常種は追って来ない。走る脚がさらに速さを増す。

後ろを振り向くと、通常種がもうすぐそこまで迫っていた。街で見た通常種と違う。ヤツらはこんなに速く走れはしなかった。だが、背後の通常種の走りは速く、普通の人間と変わらなかった。

「聞いてねえ・・・こんなの聞いてねえぞ！！」

俺は絶叫した。それに刺激されたのか、通常種は一斉に吼え出した。怖い。死ぬほど怖い！喰われたくない！俺の脳裏に、通常種に喰われた追跡者が浮かんた。嗚咽がこみ上げてくる。吐息に混じって絶望的な喘ぎが漏れる。恐怖に押し潰されそうになる。俺は逃げ切れるのか？

サクト！ライターを点火しろ！右側の側溝にガソリンが流れている！

7号の声が聞こえ、俺の脳は覚醒した。道路が終わり、俺は迷わずポケットからライターを取り出し、上体を低くして側溝に火を近づけた。

ボツ！一瞬、青い炎が上がり、側溝が火を噴いた。炎は恐ろしい速さで上に向かって道路を遡っていく。

通常種は両側を炎に挟まれて少し怯んだように見えた。

次の瞬間、背後から空気の衝撃波が到達した。それに続いて、物凄い轟音と共に炎の濁流が通常種の大群を飲み込んだ。

道路から出た俺は覚悟を決め、正面にダイブして避けようとした。まだまだ！走って正面の建物の裏に回り込め！！

すんでのところまで7号が叫ぶのが聞こえた。目の前には宝くじ売り場の小さな建物がある。俺は歯を食いしばり、その裏に転がり込んだ。

その瞬間、炎が背後に激突した。窓ガラスがガタガタと揺れ、せき止められた炎が隙間から噴き出し、やがて消えた。俺は力尽きてその場に倒れ伏した。生き残った。その事実が重く心に響いた。

建物の角から少し顔を出してみる。マル力堂の側面からは灰色の煙が立ち上っていた。俺が通った道は倒壊していて見るも無残だった。僅かに残ったコンクリートにはヒビが入り、鉄骨が露出している。辺りには建物の残骸が散乱し、腐乱した肉の焼け焦げる嫌な臭いが漂っている。恐らく、逃げ遅れた通常種たちが焼けているのだ。不意に、タクマと7号を俺は思い出した。彼らは非常階段から逃げると言っていたが、上手く逃げられたのだろうか。もし爆発に巻

き込まれたとしたら・・・。

「おーい！大丈夫か、サクト！」

遠くの方でタクマの声が聞こえた。振り返ると、7号を負ぶさったタクマがこちらに歩いてくるのが見えた。俺は胸の内側が熱くなるのを感じた。良かった。みんな無事に脱出する事ができたのだ。

「おう！お前らも大丈夫か？」

タクマは右手を振り上げ、親指を立てて“大丈夫”のサインを返した。7号は日光の眩しさに慣れていない様子で、目を半分閉じていた。しかし、二人とも無傷のようで、俺はほっとした。

「7号！あんたの言うとおりにしたぜ？」

俺は言った。すると、7号はわずかに口元で笑った。

「いいや、お前はまだ私の事を信用しちやいない。私にはわかる。

「な、なんだと〜！」

すると、タクマが慌てて止める。

「や、やめなよ。無事に脱出できたんだし、もっと仲良くしなきゃ。」

「

俺はにやりと笑った。

「そうだな・俺たち、案外チームワーク良かったかもな。」

馴れ合いはしない。こうしている今も一瞬で非常に危険な状況に変わり得る。

また7号が妙な事を言った。俺たちは若干気まずい雰囲気になる。

「でもよ、あんたが居れば大丈夫なんだろう？」

俺は聞いた。

ふ・ふ。答える必要は無い。

7号は欠伸をした。

スポーツセンターへ（前書き）

お待たせしました。

スポーツセンターへ

マルカ堂を脱出した俺たちは、スプリンターの停まっている場所まで戻った。

これから当分は歩きで移動する事になるので、持っていく道具は限られていた。地図や水筒、懐中電灯などをリュックに詰め、俺に会う前にタクマが集めた防災グッズと一緒にした。

しかし、大した食料は無く、2日間保てば良い方だった。それに加え、7号の体調も楽観視出来なかった。たまに呼吸が苦しそうになり、水を欲する。彼女のためにも、いち早く安全な場所を探さなければならぬ。俺たちは焦っていた。

「レミントンは置いていくしかないな。」

愛銃を握ったタクマが首を振った。確かに、長い銃身は携行するには不便かもしれない。でも、昔からタクマが特別大事に手入れしてきた代物だ。

「お気に入りなのに勿体無いだろ。それに、結構役に立ったじゃないか。」

一時的とはいえ、追跡者を撃退したのはこの銃だ。現在ある唯一の武器でもあるし、捨ててしまうには惜しいのではないだろうか。

その銃はお前だ、お前が持っていけ。

スプリンターのボンネットに横になっている7号が俺に言った。

タクマが上から制服のブレザーを被せてやり、服も体育着を下着代わりに着せて暖かくしている。それまではぶかぶかのYシャツをペロっと一枚身に付けているだけだったので、外の寒さに耐えるにはさすがに無理があつた。

ボンネットの上でミノムシのように服にくるまって寝ている7号を見ると、俺もつい表情がほころんだ。レナに瓜二つなだけあって、幼いながらも整った顔立ちをしている。こんな少女が変種だなんて、正直今でも信じられない。

荷物は全てお前が運べ。

「えーっ！」

俺は思わず不満の声を上げた。

「悪い。僕は7号さんを負ぶさるから、荷物までは持てそうにないよ。」

それは分かっているんだがなあ……。俺はため息をついた。

でもまあ、この状況じゃ仕方ないか。いつ敵に襲われてもおかしくない今、荷物の重さなんて気にしている場合じゃない。

俺はリュックに手をかけた。中身がパンパンに詰まったグレーのスポーツリュックはずっしりと重かった。背負うと、危うく後ろによろけそうになるくらいだった。

「よし！じゃあ移動しようぜ。」

すると、タクマが真っ先に手を上げた。

「提案なんだけどさ、まずは東久留米スポーツセンターに行かせてくれないかな？」

そういえば、追跡者に遭遇する前はスポーツセンターを目指していたんだっけ。俺は思い出した。

「ああ、たしか、避難所があるんだっけ？」

「うん……。」「

すると、タクマは急に暗い顔をした。唇を噛みしめ、俯いている。

「タクマ？」

俺が聞くと、タクマは慌てたように首を振った。

「いや、何でもないよ……。あそこならきつと安全だろうなっと思っ
つて。」

「そっか。ならいいんだ。」

とは言っても、タクマのこの不自然な挙動は何だかひっかかった。その場所は本当に安全なのか？

7号が言った。

「うん。携帯が繋がった頃、そこに避難してる知り合いから連絡があったんだ。数十人で集まってバリケードみたいな物を作ってる

って言ってた。」

「へえ！じゃあかなり安全そうじゃん。」

「ああ。」

タクマは頷いた。

俺は7号の方を向いた。

「文句ないだろ？お前も早く落ち着いて休める場所に行った方がいい。」

すると、7号は少し考え込むような仕草をした。

そこが今も安全だとは限らない。その場所に着く前に敵に遭遇する危険性もある。

「いや、ここから近いし大丈夫だと思う。ガムシヤラに放浪するよりは安全じゃないかな。」

確かに、俺は思った。俺としても、出来るだけ早く座って休める場所に行きたい。それに、何と言ってもお腹が空いた。今朝は朝食だって食べなかったし、あんなに激しく動いた後は腹も減る。どうせなら、マル力堂でくすねてくれば良かった。スナック菓子やカロリーメイトなら腐ってはいないだろう。ああ、想像したら余計に腹が減ってきた。

その時だった。

何か来る・・・！

ボンネットで寝ていた7号が、突然酷く焦った様子で言った。

「何だって！？」

俺は7号を見た。

彼女は目を固く瞑って集中しているように見えた。第六感覚を使っ

て神経を周囲に集中させているのだ。

動きが速い。それに大型だ。しかし、それ自体は生物ではない・・・？

7号は苦悶の表情でブツブツと呟いた。しかし、言葉は余りに断片的で謎解きみたいだ。

「こつちに来てるのか？隠れた方が良くんじゃないか？」

俺はあたふたしてタクマに言った。

「この場所じゃ無理だよ！7号さん、いったい何が来るんだ？」

しかし、7号は険しい表情のまま黙っている。額からは大量の汗が流れ、顔色も悪い。かなり辛そうだ。

その時、かなり遠くの方から微かに自動車のエンジン音のような音が聞こえてきた。そして、それはだんだんハッキリと聞こえるようになってきた。

タクマもそれに気づいたようで、その方向を向いた。

音はマルカ堂の反対側から聞こえていた。俺たちがスプリンターで走って来た方向だ。真っ直ぐ伸びる道路の先に、一台の白いマイクロバスが確認できた。

「サクト、車だ。きつと避難者だよ！」

興奮したようにタクマが言った。

「ああ・・本当だ。」

そうは言ったものの、俺はある種不思議な感覚を覚えていた。ここに至るまで嫌と言うほど非日常的な光景を見せつけられ、今まさに凄惨な光景が広がるこの状況にやって来た一台のマイクロバス、きつとあの車内には何人かの生存者が乗っているに違いない。生きている人間に会うのは久しぶりな気がした。

しかし、何故だかそれが周囲の景色と噛み合わない。当たり前のようにマイクロバスが走っている事が、とても信じられない事のように見える。

マイクロバスは速度を一定に保ったまま、どんどん近づいてくる。タクマは手を大きく振った。

「むこうも手を振ってる！僕たちに気づいたんだ。」

見ると、マイクロバスの窓から黄色いタオルが振られていた。クラクションが鳴った。

「おい！」

低い男の声がした。続いて、窓から数人の男女が顔を出した。性別はバラバラだが、年齢はいずれも60代前後に見える。

マイクロバスはスプリンターの近くに停まった。

運転手の男性が慌ただしく降りてきた。

「君たち、大丈夫か!？」

背が高くて体育会系っぽい運転手は、他の人に比べるとかなり若い。彼はこちらに歩み寄って来たが、突然、腕で鼻を覆った。

「あ・すみません。ちょっとワケがあつて、お酢が体にかかってしまったんです。」

タクマが恥ずかしそうに答えた。すると、男は一瞬怪訝そんな顔を見せたが、すぐにホッとしたようで微笑んだ。

「そうか・いや、こちらこそ失礼。君たちもいろいろ大変だったようだな。しかし、こんな所に居ては危険だぞ。早く私たちの車に乗りなさい。」

後半部分の勢いに、俺もタクマも目を白黒させた。

「ちよ、ちよっと待って下さい!すみません・失礼ですが、あなた方は何の団体なんですか？」

タクマが尋ねると、男は「ああ、そうか。」と謝った。

「私は小本です。市が主催する卓球教室の講師をしていてね。こちらの皆さんはそのメンバー。まあ、それ以外の人も混じっているんだ。」

小本は、車内を示すと、窓から顔を出していた何人かが会釈した。タクマも俺たちに関して簡単に自己紹介した。7号については、どという訳か俺の妹として紹介した。

「実は車のガソ・いや、僕たち、これから歩きでスポーツセンターまで行くんです。避難所があるそうなので、皆さんも一緒に行きませんか？」

無免許運転をしたという事実は、やっぱり隠して置いた方がいいかもしれない。タクマはその点を言いかけたが、なんとかがごまかした。

すると、小本は突然黙り込んだ。車内の人々も、何故だか妙にそわそわしている。何だろう、この嫌な空気は。

「どうしました・・・？」

俺は不信に思って尋ねた。

「お兄ちゃん、東久留米スポーツセンターの事を言っているのなら、あそこは行かない方がいいよ。」

車内から一人の老婆が言った。黄色いタオルを振っていた人だ。

小本は下を向いたまま黙っている。明らかに気まずそうな雰囲気だ。

「すみません・・・。それは、あの・・・どういう意味ですか？」

「ちよっとトラブルが起こったんだ。それで、私たちはあそこから逃げて来た。」

小本が答えた。

「トラブルって、いったい何が起こったって言うんですか!？」

タクマが小本の服の首もとを掴んだ。珍しく冷静さを失っている。小本は車の方をちらと見ると、やがて押し殺したような声で話し始めた。

「あの時は場が酷く混乱していて、私も詳しい事はわからない。これはあくまで推測なんだが、おそらく、避難者の中にあれが混じっていたのだ。大きな混乱が生じ、逃げようとする人たちによってバリケードも破られてしまった。」

小本は一旦そこで言葉を切った。不可解な説明だったが、俺にはすでに意味が分かっていた。

あれがいたとはつまり感染者が混じっていた、という事か。

長い間黙り込んでいた7号が突然口を開いた。

それが通常種か、変種か。まあ、そんな事はどうでも良い。ただし、これでもうその場所へはもう行けなくなっただな。

「待って下さい！避難者の中に感染者がいたって事ですか？それじゃあ、避難していた人たちはどうなったんだ！」

「タクマ落ち着け！」

俺はタクマの肩を掴んで止めた。タクマは声を荒らげて、明らかに取り乱しているようにみえた。友達の安否が心配なのは無理もな

いが、こんな事をしていても仕方がない。

「友達はずっと大丈夫だって。今すぐ助けに行こう！」

「女の子・・・小学生の女の子を見ませんでしたか！？短髪で背も低いんですが！」

タクマはバスの人たちに問いかけた。しかし、誰も何も答えない。「すまない。あの時は逃げる事に夢中で、よく・・・。」

小本がそう言うと、タクマはがっくりと膝を折って倒れた。俺は慌てて声をかけたが、彼には聞こえていないようだった。

俺は驚いた。彼の目には涙が浮かんでいた。

「タクマ・・・？」

タクマはぎゅっと固く目を閉じ、歯を食いしばっていた。僅かに体を震わせて泣いている。

やがて、タクマは震える声でぽつりと言った。

「友達じゃないんだ・・・友達じゃないんだよ。あそこにいるのは、ユイなんだ・・・。」

俺は言葉が出なかった。冷たい手で心臓を掴まれたような感触がした。

どうして今まで忘れていたんだろう。タクマにはたった一人の妹がいるのだ。今年小学三年生になる妹が。

彼の家に遊びに行く時、いつも軽く見かけるくらいだけど、はっきり顔は覚えている。昔から、タクマはいつだって妹の事を本当に気にかけていた。地域の夏祭りなんかの時には、ユイちゃんの手を引いて必ず一緒に来ていた。

「僕は最低の兄だ！僕がもっと早く助けに行っていれば・・・くそッ！くそッ！」

タクマは自分の膝を殴り続けた。

俺は胸がキリキリと締めつけられるようだった。

タクマがユイちゃんの事を今まで忘れていたはずがない。おそらく、タクマはずっと前から彼女を助けに行きたかったのだろう。行かせてやれば良かった。それなのに、俺は彼を無理に引き止めてし

まった。マルカ堂で、タクマはあんなに反対していたのに・・・。
全て俺の責任だ。

常に他人を慮る性格をしている彼の事だ。俺の家族が行方不明だから、自分だけわがままを言うわけにはいかないと遠慮していたのかもしれない。

いずれにせよ、俺はなんて馬鹿だったんだろう。俺は拳を握りしめた。

「お・・・あの・・・」

考えもなく口に出しかけた言葉は弱々しく消えた。

駄目だ。言葉が見つからない。俺の心に罪悪感がさらに重くのしかかる。

「そうだったのか・・・妹さんが・・・すまない。」
そう言ったのは小本だった。

それから小本は何やらぶつぶつと下を向いて呟き、くるりとバスの方に向き直った。

「古館さん、たしか車の運転できましたよね？」

小本はマイクロバスに向かってそう言うと、車内に戻っていった。俺には彼が何を考えているのか分からなかった。

「できるけど、それがどうかしたんですか、先生？」

車内の奥から、驚いたような男性の声がした。

「車の運転をお願いしたい。僕は・・・この子たちと一緒にスポーツセンターにもどります。」

「なんだって!？」

俺は素っ頓狂な声を上げた。こいつはいったい何を考えているんだ? さっきまで危険だと言っていたのに、どうして突然・・・。
バスの人たちもざわめいた。

「何を言ってるんですか、先生？」

「馬鹿な事言わないで下さいよ。」

「我々はどうなるんですか、ねえ、先生!」

すると、小本は大きな声で彼らに言い放った。

「彼らを放つてはおけません！僕は彼らと一緒に助けに行きます！
そうするべきだと思うんです。」

「そんな・・・！私たちはこれからどうすればいいんですか？」

車内からはまた次々に不安そうな声が上がった。それに対し、小本は強い口調で、しかしすまなそうに答えた。

「皆さんには本当に申し訳ないです。ですが、皆さんはこのまま八国山方面に向かって下さい。なるべく道路が広くて、人通りも少ない安全な所へ。」

しかし、車内の反論は止まない。抗議するものや今にも泣き出しそうな人もいる。当たり前だ。こんなタイミングでリーダーを失う事への恐怖はこの先への不安も生む。

とうとう小本は仕方無さそうに彼らを見捨て、再び車から降りてきた。彼は小さな黒いウエストポーチを腰に巻きながら、タクマに歩み寄った。タクマは顔を上げており、ただただ目を丸くして呆気にとられていた。

「伊出君、涙を拭きなさい。君の妹さんは必ず生きている。一緒に助けに行こう。」

小本はにつこり笑った。

タクマは感極まったのかまた少し涙ぐみ、かぶりを振った。

「・・・でも、巻き込むわけにはいきません。」

小本は首を振った。

「気にするな。こういう時はお互いに助け合おう。」

急な展開だ。俺はまだついて行けていなかった。

「こ、小本さん、本当に来てくれるんですか？」

俺は思わず聞いてみた。

「ああ。君たちだけでは危ないからな。私も同行する。」

小本は振り向いた。

悪い人には見えないし、頼もしいかもしれないが、この人が7号の秘密を知ったら間違いないで面倒な事になるだろう。その点はどうにか隠さなければならぬ。とはいえ、隠しては彼女の能力を

頼りにできない。これは少し厄介だ。

何故だ。何故わざわざ危険な場所に行く？

噂をすればだ。俺は頭の中で返事をする事にした。

（あそこにタクマの妹がいるからだよ。助けるんだ。当たり前だろ。）

お前は本当にそう思っているのか？

（どういう意味だ？）

さっきあの男から聞いた情報から判断して、生きている可能性は・

（やめろ！）

俺は7号を睨んだ。

（生きてる。まだ生きてる。例えどんなにヤバい状況でも、俺たちがこの目で確認するまでは分からない。そうだろ。）

すると、7号は眠そうに目を瞑った。

私には理解できない。少ない可能性のために、何故命を危険にさらすのか。

（当たり前前的事だ。）

お前たちの“当たり前”はよくわからない。しかし、これだけは忘れるな。お前の判断は私の命を道連れにしているのだ。

そう言ったきり、7号はもう喋ろうとせず、やがて眠りについた。

「小本先生、どうしても行かれるんですか？」

バスの窓から、太った老婆が言った。小本は険しい表情のまま静かに頭を下げ、運転席の古館に見た。

「任せて下さいよ。安全運転でみんなを守りますから。」

古館は明るく笑ってみせた。

「本当にすみません。よろしくお願いします。」

小本はまた頭を下げた。

「謝る事ないですよ。先生たちもどうかお氣をつけて。」

古館は右手の親指を立てて見せた。

マイクロバスはゆっくりと動き出した。車内からはまだ不平も聞こえたが、何人かはずっとこちらに手を降り続けていた。

「さあ、行こう。」

マイクロバスが見えなくなった後、小本が低い声色で言った。

「はい。」

俺たちは同時に応え、歩き始めた。タクマはもう泣いてなどいなかった。背には7号を負ぶさり、だいぶ落ち着いている。

「タクマ。」

俺は声をかけた。どうしても謝っておかなければならない事があるのだ。

「何？」

俺はタクマの目を見た。泣きはらした目のまわりがほのかに赤い。俺は、何度も彼の目から目をそらしたくなるのをこらえた。

俺が口を開きかけたその時、

「そういえば伊出君。妹さんの服装とか、容姿に関する特徴があれば教えてくれないか？」

小本が口をはさんだ。タクマは一瞬、俺の顔色を窺ったが、俺は黙って頷いた。

タクマは小本に向き直った。

同時に俺は俯いた。謝るタイミングを失ってしまった。でも、かえって良かったのではないだろうかとも思え、内心軽くホッとしてもいた。なんとか持ち直したタクマに、また暗い話題を持ちかけるのは不謹慎だ。今はこの空気を乱してはいけない気がした。そうだ。また後で言えればいい。ユイちゃんを助けた後で、改めて謝ろう。

俺たちは、スプリンターを通った道を少し戻り、なるべく広い道を選んでスポーツセンターに向かった。途中、何度も通常種を見かけたが、遠くに見えるだけで追っては来なかった。それにしても、生きている人間は全く一人もない。昼間なのに凍りついたように

静まり返った街の様子は、普段とさほど変わらないように見える。街路樹や標識、建物だって荒らされていないものの方が多い。人間だけが景色から切り取られているようだ。

乗り捨てられた車があれば拝借させてもらおうかと軽く思っていたが、そんなに都合よく転がっている車は無かった。

また、7号はまだ眠っているらしかった。さっきからずっと話しかけてこないし、本当に眠っているのかもしれない。7号のサポーターが無いのはかなり不安だが、具合が悪いのは心配だ。スプリンタ―の所で水を飲んでいたが、苦しそうにして呻く原因はまだ分かっていなかった。彼女の身体の事も考えて、なるべく早く安全な場所に行かなくてはならない。

でも、そもそも安全な場所なんてあるのだろうか。どこもかしこも通常種や変種だらけ。彼らの脅威から完全に逃れられる場所なんて、本当にあるだろうか。

いや、考えるのは止そう。今そんな事を考えたって仕方がない。ユイちゃんを助ける事に集中しよう。

やがて、黒目川を越えると、いよいよ東久留米スポーツセンターが見えてきた。黒目川は東久留米を代表する川で、下流では荒川に合流している。幅は狭く、割と浅い。飲み水に困った時の最終手段に使えるそうだ。ここから上流に向かって少し行くと、落合川との分岐点に出る。この場所なら俺も知っていた。

「いよいよだな。」

小本が呟いた。俺は身が引き締まるのを感じた。

「はい。建物の中へは僕と小本さんで入りましょう。」

「え？」

俺が驚いていると、タクマは説明した。

「サクト、君には外で7号さんの様子を見ていて欲しい。」

続けて、タクマは小声で囁いた。

「7号さんに、中の状況を外から教えてもらいたいんだ。どのみち、一緒には連れていけないからね。」

タクマは7号に目をやった。なるほど、彼女の能力の援助があればいくらか安全かもしれない。

「でもさ、俺だけ安全地帯にいるなんて・・・なんかすつきりしないんだ。」

すると、小本が諭すように言った。

「いや、なるべく少ない人数で行った方がいいだろう。中では何が起こるかわからないからな。」

そんな事はわかっていた。ただ、自分だけ安全な場所に避難している事がひどく悪いことのように思えたのだ。

「サクト、大丈夫だよ。」

俺の気持ちを察してか、タクマが声をかけてきた。

「外で待つててくれ。すぐに戻るさ。」

タクマは爽やかな笑みを浮かべた。俺は一応頷いたが、やはり心配だった。7号のサポートがあるとはいえ、敵に囲まれたら一巻の終わりだ。館内は電気が切れていて暗いだろうし、逃げるにしてもかなり困難だと思う。

だが、彼には行かなければならない理由があるのだ。どんな危険も、ユイちゃんの命には代えられない。彼にはもうその覚悟ができている。

そうこうしているうちに、俺たちは東久留米スポーツセンターに到着した。

駐車場にはたくさんの車が停まっている。銀色をした建物の外観に異常な点は見られない。外壁に取り付けられた螺旋状の避難スロ―プも、使用された形跡はない。辺りは不気味なほどの静けさに支配されていた。

駐車場を通り、駐輪場を過ぎると、正面入口に来た。3つ並んだガラス戸の両端は大きく割られ、真ん中のガラスの奥には傘立てや

長椅子が立て掛けられていた。おそらく、これが小本の言っていたバリケードだろう。しかし、ここからでは中の様子はそれ以上はよく見えなかった。

タクマは7号を下ろし、地面に寝かせた。俺は駐輪場のそばに荷物を置き、そこで待つことにした。

ふと見ると、タクマは7号の耳元で何かを囁いた。すると、7号は弱々しく頷いた。

「じゃあ行きましょう。」

タクマが小本に言った。小本は黙って頷き、入り口右側の戸に身体を滑り込ませた。続いてタクマも戸に近づく。

その後ろ姿を見ていた俺は、堪えきれずに押し殺した声で言った。
「絶対に戻って来いよ。」

俺が呼び止めると、タクマは僅かにこちらを振り返り、ニヤリと笑った。

「7号、タクマたちは今どこにいるんだ？」

俺は駐輪場の屋根の上で7号を抱きかかえながら、彼女に聞いた。タクマたちが中に入ってからもう随分時間が経ったように感じる。

あれから7号は黙ったまま集中しているし、俺はずっとそわそわしていた。

タクマたちは無事だろうか。ユイちゃんはまだ生きているのだろうか。そんな事を考えていると、俺は気が気じゃなかった。

（黙れ。集中できない。）

7号が言った。額には玉のような汗が光っている。さつきから、彼女の様子は明らかにおかしい。呼吸も乱れており、咳き込む事も増えた。

俺はリュックからタオルを取り出し、彼女の汗を拭いた。できれば早く休ませてやりたいのだが、今はそうもいかない……。

その時だった。

苦しげにふらふら揺れていた7号の頭が、突然、ガクリと脱力したようにうなだれた。

一瞬、あまりに唐突な出来事に、俺は何がなんだか分からなかった。しかし、7号の顔を見た瞬間、俺は激しく狼狽した。

7号は、白目を剥いて痙攣していた。口は半開きの状態ではくぱくしている。

「お、おい！どうしたんだよ！7号！聞こえるか！」

俺は7号を揺さぶった。しかし、7号は全然反応を示さない。

今度は、頬を弱く叩いてみた。すると、俺は7号の頬がものすごく熱い事に気づいた。さらに、7号の顔色がみるみるうちに青ざめてきた。

俺は唇を噛んだ。まるで悪夢のようだった。いきなり気を失うなんて、いったい7号の身に何が起きているのだ。

俺はどうすればいい！このままではタクマたちに7号からの情報が届かない。そうしたら・・・そうしたら・・・！最悪のビジョンが浮かび上がる。俺は頭にどんどん血が上るのを感じた。

落ち着け。冷静になつて考えるんだ。俺は頭をかきむしった。しかし、考えようとすればするほど、頭の中がごちゃごちゃして回らなくなってきた。

「タクマーーーー！！！」

俺は彼の名を呼んだ。絶叫は虚しく響いた。

しかし、スポーツセンターは依然として残酷な静寂に包まれたままだ。外からでは中の様子など全く分からない。

俺は拳を固く握りしめた。中はどうなっているんだ。もしかしたら、夥しい数の通常種に追われているかもしれない。畜生！助けに行くか？俺の頭にそんな考えが浮かんた。いや、今7号のそばを離れるわけにはいかない。

考える。考える。何か方法があるはずだ！

スポーツセンターへ（後書き）

諸事情のため、来年春頃まで休載します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8292u/>

じゅもっこの下にて待つ

2011年12月2日14時45分発行